
奇跡の法則

めろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡の法則

【Nコード】

N9960X

【作者名】

めろん

【あらすじ】

はじめまして、じゃない方もいるかもしれませんが。

この小説は魔法少女リリカルなのはの世界観にオリジナル要素をかなり入れた作品です。

実は昔あるサイトで公開していたものなので、見覚えのある方ももしかしたらいらっしゃるかもしれません。

最近忙しさがましになってきたので、続きを書いていこうと決断し

ました。

よろしくお願いします。

時系列は闇の書事件から六年後。

A's Strikersの間の話です。

2011-10-28

プロローグ

奇跡。

そんな言葉が、この世界には存在する。

人はそれを「希望」の象徴だと信じ、自ら求める者が多い。

奇跡的な回復。

奇跡的な勝利。

奇跡的な解決。

奇跡的な進化。

奇才。奇特。奇知。奇骨。

そんな足跡が奇跡である、と。

――が。

しかし。

奇跡という言葉には、決して希望ばかりが含まれている訳ではない。

表があれば、裏がある。

表があるから裏がある、と言い換えてもいい。

少なからず、負の要素を孕んでいる。

負の要素が潜んでいる。

奇跡的な衰弱。

奇跡的な敗北。

奇跡的な破綻。

奇跡的な、死。

奇怪。奇異。奇禍。奇妙。
そんな足跡も奇跡であろう。

と前置きをしたところで、これから語るのはそんな奇跡のお話。

希望の奇跡なのか。
絶望の奇跡なのか。

決めるのはあなた次第だ。

ただ一つ言えるのは。

奇跡なんてものは唐突に、何の前触れもなく訪れるということだ。

――さて。

それでは始めようか。

いくつもの出会いが奇跡を紡ぎ、ある軌跡へと収束する。

そんなありふれた、日常の物語。

あの日あの時

6月3日。

はじめと不愉快さが増す季節だが、それでも世間の学校はお構いなしに登校日である平日。

梅雨に入りかけの時期でもあり、只でさえ気だるい朝をいっそうと辛いものにする。

「雨、降るかな？」

通学路。

ぼつりと呟く少年もまた、例に漏れず学校の制服を着用していた。

私立桜波中学校——地元ではわりと有名な進学校である。

少年の名は、神崎 このは 木葉。

真っ直ぐに伸びた綺麗な黒髪と端正な顔立ちには到底似合わない、ふてくされたような表情を崩さずに歩を進める。

「天気予報見なかったの木葉？ 午後から90%だって言ってたよ」

その隣を歩くのは、木葉よりも頭一つ分背の低い少年。

木葉自身そんなに長身ではないため——むしろ一般平均よりも低い——その少年の背の低さがうかがえるだろう。

「いや、さっき起きたとこだからさ」

「……相変わらずだなあ。だいたい予想してたからさ、傘二本持ってきてるよ」

「ああ。悪いな、ひで」

南坂 秀。

木葉と同じ、三年生を示す赤色のネクタイをしていなければ、小学生と言っても通じそうな体躯だ。

彼は幼なじみの平然とした態度を見て、軽くため息をついた。

「本当に悪いと思ってる？」

「思ってるさ」

「それじゃ、いきなりクイズ。木葉の家に僕の傘が何本あるでしょうか？」

「……8本くらい？」

「……………」

「ごめん。実は何とも思っていないんだ」

「だろうね。知ってる」

ちなみに9本ね、ともう一度、今度は深くため息。

それから特に会話もなく、いつもの通学路をゆつくりと歩いた。時間にして約5分。

桜波中学校の目印である桜並木が目の前に広がってくる。

「んっ？」

「どうした？」

と、突然首をかしげる秀の視線は校門とは逆の方向へ向けられている。

「うん、今日は1人足りないなーってね」

その先には、4人の少女たち。

「ほら、サイドポニーの子」

「……ああ、ほんとだ」

いつもは5人で登校する彼女たちは、桜波中学校の間でも大きな話題の1つになっている。

なんと言っても、個々人の容姿レベルが格段に高いのが原因だ。

私立聖祥大付属中学の制服に身を包んだ彼女たちは、桜波の中では『聖祥レンジャー』とか、なんとも言えない——率直に言えば痛い——俗称があったりする。

毎朝、桜波中学前の桜並木で待ち合わせをするらしく、その時間に合わせて登校する連中もいるほどの人気ぶりだ。

「5人中全員が可愛いってのはあれだよな、『毒をもって毒を制す』ってやつ」

「いや、『類は友を呼ぶ』でしょ」

「同じだろ」

「ニュアンスがかなり違うんだよ」

と2人が軽口をかわしていると、4人はすでに反対方向へと歩いてしまっていた。

「結局5人目はこなかったね。……『聖祥ピンク』だっけ？」

「みたいだな。俺には何の関係もないけど」

関係したくても無理だ、と興味無さげに校門をくぐる木葉と、それを急いで追いかける秀。

しかし。

木葉のつぶやきは、本人の知らないところでひっくり返されることになる。

それとは歩みを逆にする4人の少女たち。

「あの人でしょ？ あんたたちが言ってたのって」

歩き始めてすぐに、1人の少女が話題を持ちかけた。

日を受けて輝く金の髪。

すこし翠の入った瞳からは、勝気な性格がうかがえる。

「そうやよ。神崎木葉って言うてたかな」

それに答える茶髪の少女は、今来た道を軽く振り返りながら言う。すっかり緑に染まってしまった桜の木々のなか、ちょうど話題にあった少年が校門をくぐったところだった。

「なんやアリサちゃん、興味あるん？」

ニヤリ。と獲物を見つけたかのように口を吊り上げ、アリサと呼ばれた少女へ視線を戻す。

「なっ、ち、違うわよ！昨日からフェイトが何度も嬉しそうに言ってたから気になっただけ！」

「ほう、そらフェイトちゃんに詳しくお話してもらわなな？」

「あ、アリサ！？違うんだよ？私はただ、同じ歳の仲間が増えるのが楽しみだけで……ね、はやて？」

「んー。なんや、つまらんなー」

桜波中学校とは逆方向の通学路。

3人の少女たちが歳相応の色恋話に会話を弾ませる中、1人だけはどこか複雑な表情を浮かべていた。

まるで何かを案じるような、慈悲深い瞳で。

「どうかした？すずか」

そんな態度にはじめに話をふった少女、アリサが気付き少し心配そ

うに尋ねる。

「ううん、ちょっとね。その男の子も大変だなーって」

ああ、確かにね。

と納得したアリサは反対側のフェイトに顔を向ける。

「えっと、フェイトのお兄さんが見つけたのよね？」

「そうだよ。クロノも同じようなこと言ってたなあ」

――追憶。

三日ほど前のこと。

クロノ、という青年が作成した報告書には、こんなことが記されていた。

第97管理外世界『地球』

闇の書発現のこの地において、魔力を持った少年を発見

その反応は緊急を要するほどではなく、警戒は不要かと思われる

しかし、場所が場所であり念のためにしばらくの監視を決定

1ヶ月の監視の後、何もなければ少年を管理局で保護

その際、改めて彼の処遇を決定する

「でも、なんで保護しなきゃいけないのかな？何もなかったらその

「ままでもいいんじゃない……？」

すずかの表情は一行に晴れる気配がない。

フェイトもそれに同調するかのようになり、声のトーンが少し下がった。

「本当は監視もいらなくらいなんだけどね。この海鳴市は『そういうこと』が起きやすい場所らしくて。だから変なことが起きちゃう前に、本人に理解しておいてもらったほうがいいだろう、ってクロノが」

「クロノくん、真面目さんやからなー」

暗くなってしまったその場の空気を変えようと、はやてはわざと明るい口調で話をつなぐ。

「すずかちゃんは、なにがそんなに心配なんや？」

「……だって、知ってるから。なのはちゃんがすごく大変だったこと」

今この場にはいない、もう1人の親友を思う。

それは、まだみんなが小学生のころの記憶。

「そ、そういえば、なのはは今日お仕事だった？」

そのことに際して少し恥ずかしい思い出をもつアリサは、何とか話題を変えようと慌て気味に尋ねる。

「うん、お昼には学校に来るって」

昔その話を聞いたことのあるフェイトは、アリサの意を察したのかクスクスと笑いながらそれに返す。

そんな対応に少々顔を赤らめたアリサは、そっか、とだけつぶやいて再び前を向いた。

本日の天気は曇りのち雨。

今も空は淀んだ色に包まれているが、この4人の間は暖かい雰囲気
で満たされていた。

平和な日常。

今思えば。

それは、嵐の前の静けさだったのかもしれない。

始まりをあげよう

「今日は言わないんだね、『面倒くさい』って」

昼休み。

午前の授業を消化し、午後の授業へと移行するまでの長いようで短い安息の時間。

木葉の席までやってきた秀がまず放った言葉がそれだった。

「お前さ、わざわざそれ言いに来たの？」

「そんなわけないでしょ。ご飯食べよ？」

新学年が始まって2ヶ月ほどが経つ教室内では、すでに各々の所定位置が決定していた。

木葉と秀。

この2人が一緒なのは1年生のときから変化なく、今日もまた例外ではなかった。

「でさ、何か理由でもあるの？いつでも暇を見つけては言ってる言葉なのに」

「そんな執念は持ったことねえよ」

口癖を言うタイミングを見計らうなんて。

それはすでに口癖ではないだろう。

弁当に箸をつけてすぐ、これもいつも通りの他愛ない会話。それは、2人の中ではすでに日常の1つになっている。

「何となくけどな、今日は面倒くさそうなことばかり起きるよ
うな気がしてさ。溜めてるんだよ」

「回数制限あったんだ……」

呪いみたいだね、と苦笑。

「ちなみに今日の『面倒くさ指数』は――」

「基準がよくわからないよ。80ポイントくらい？」

「3テラ」

「ハイスペック!？」

単位もケタも違った。

「な?溜めてないとやってけないだろ？」

それと時を同じくして、聖祥大付属中学。

屋上で昼の一時を過ごす4人は、ついさっき学校にやってきたもう
1人の親友を迎えていた。

「お疲れさま、なのは」

高町なのは。
聖祥ピンク。

彼女もまた、人気が出るのが十二分に納得できる容姿をしている。

「ありがとう、フェイトちゃん」

その顔つきに似つかわしい太陽のような笑顔も、彼女の魅力を上げるのに手伝っているようだ。

「それで、今日は何のお仕事やったん？」

「んとね。アースラ組の代表として、クロノくんと一緒に本局に呼び出されたんだけど」

なのはの母親がフェイトに預けていた弁当を受け取り、はやてが横に詰めてくれたおかげでできたスペースに腰を降ろす。

いつ雨が降ってもおかしくないような天気の中、それでも屋上で昼食をとるのは、彼女たちに何らかのポリシーがあるのだろうか。

「ちょっと、変なんだよね」

「変って、どんな風にや？」

えっとね、と左手を軽くあごに添え、悩ましげな表情を浮かべるなのは。

それは、今朝のすずかが見せたそれによく似ていた。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、『神崎木葉』くんのこと……」

「ああ、それなら今朝詳しく聞いたところよ」

「うん。その男の子も大変だって話だよね」

それなら話が早いね、と一息。

「クロノくんが報告書を提出したら、本局から緊急指令が出たの。
内容は、『神崎木葉の即時保護』」

「えっ!?!」

突然のことだ。

その話からだけでは、疑問しか生まれない。
なぜ、の一点張りしか。

「クロノは、1ヶ月くらいは様子見だって……」

「その予定だったんだけど、私も詳しいことは何も——っ」

刹那。

目の前からアリサとすずかが消えた。

「なっ、——っ!?!」

否。

消えたのではなく、逆だ。

なのは、フェイト、はやて。

魔術師である3人だけが、世界から切り離されたのだ。

「これは——結界っ!？」

——そして。

ここにも1人、世界から分断された者がいた。

「ほらな……」

目の前で弁当を食べていたはずの秀が、教室中の全員が、消えた。少なくとも、彼の目にはそう映った。

「やっぱり、面倒くさくなった」

窓の外では、雨が降り始めていた。

蒼白い幻想的な空間に取り残された3人の眼前には、空中に展開された電子パネルが浮かんでいた。

「3人とも、聞いてくれ」

それに映るのは、彼女たちの恩人とも言える青年。どうやらテレビ電話のようなものらしい。

「クロノくん、この結界は？」

少しずつ降り出した雨が彼女たちの肌を濡らすが、そんなことは気にしていられない。

今現在の最優先事項は、状況の確認。
及び、打破である。

管理外世界での魔法——結界の使用は余程のことが無い限り許可がでない。

厳しい罰則が生じるのは周知のことだ。

「いや……だが、ある程度の予測はつく」

「神崎木葉くん、やね」

そういった状況下で何のためらいもなく魔法を使用するものは限られた者。

自己防衛、もしくは——犯罪目的。

「そうだ。本局からの緊急指令は、このことを案じてかもしれない。確証はないが、神崎木葉には『何か』あるとみていいだろう」

「じゃあこの結界は木葉くんが？」

単純に考えればそうなるだろう。
慣れない魔法の誤作動か何かか。

それが最も妥当な線だ。

——そう、思いたかった。

「いや。結界は何の知識もない者が扱えるようなものじゃない。それに、魔力の質が違いすぎる」

この結界が木葉のものじゃないならば。

考えられる可能性は、1つしかなくなってしまうから。

「……クロノ、彼は今どこに？」

「学校にいたが、自宅の方へ向かっているようだな。結界で情報がジャミングされてしまっているせいで、詳しくは掴めない。パツケージの自宅で待ち伏せてくれ」

待ち伏せ、とどこかこちらの方が犯罪の匂いがする単語に、フェイトは苦笑する。

「それじゃあ、いこうか」

いろんなことがあった。

だけど、乗り越えてきた。

この3人で。

今回も、きっと。

そんな確信があるからこそ、2人は笑顔でうなづく。

「いくよ、レイジングハート」

そして、呼ぶ。

「いけるね、バルディッシュ」

自分の、相棒の名を。

「いくで、リインフォース」

家族の名を。

『セット・アップ!』

3人は、空を駆ける。

「面倒くさい」

平日の真っ昼間。

いつもはちらほらと見える人影が1つもないのは、異常といえた。

「ああ、1回使っちゃったよ」

まだ溜めとかなないと、と軽く言うが内心にはかなりの焦りがあった。

「……黒魔術、呪い、夢、幻術？現実的じゃないな」

あながち間違っではない予想で、思考は自己完結。

とりあえず家に帰って寝さえすれば元に戻っているだろう、という楽観的な考えだが、そこには悪夢しかないと、木葉は知らない。

対して、魔術師の3人はすでに神崎家に到着していた。
そのまま指示通り木葉を待ち伏せしようと思っていたが、

「……今、中から音しなかった？」

「うん。何か物音がするね」

ほんの微かにだが、人の気配を感じる家の中。
それに耳を澄ませていると突如、ひと際大きな音がした。

——何かが倒れるような、嫌な音。

「帰ってきてるんやろか？」

だとしたらすごい順応性だね、となのは。

「それじゃあ、入ってみ——」その必要は、ありませんよ」

フェイトが一步足を進めた瞬間、その声は1人の少女によってかき消された。

とても澄んだ、透き通るような声。

「あ……………」

もし神崎木葉が今回の事件に関与しているのなら、ここにいるのは

彼女たち以外に二組しかない。

木葉と、結界の首謀者。

目の前にいるのは、明らかに後者だ。

その彼女が、目的の家から普通に出てきたのだ。
ふらっと、買い物に行くかのように。

「えっ……」

だがしかし、驚愕すべきはそこではない。

彼女の美しく魅惑的な純白『だったであろう』ドレスが、何かで赤黒く染め上げられていたのだった。

君の罪は

[illegible]

少女のドレスを染め上げているのは、まさしくそれだった。足元から首の上まで、いくらかは顔にまで付着している。それだけの血を流せば、その持ち主だった者はすでに――

「そ、その血……まさかつ——」

いくら多くの死線をくぐり抜けてきた彼女たちとて、さすがに冷静を保てる状況ではなかった。

「神崎、木葉くん、の」

実際、ひどく声が震えているのが自分でも分かる。

ついさっきまで生きていた彼が。

なんの罪もない彼が。

仲間になるはずだった彼が。

「神崎、木葉……？」

しかし、少女は平然と、そして悠然とした態度で言葉を紡ぐ。

「ああ、Aさんのことですか」

「A……さん？」

はい、と頬の血を右手で拭う。

そんな仕草1つにも、どこか気品があるように見えてしまう。

「あなた方のことも、情報として受け取っています。Bさん、Cさん、それからDさん」

なのは、フェイト、はやての順に血を拭った手で指を指しながら言い放つ。

その指から血が滴り落ちる。

ぽつり、と地面に。

何の情緒もなく幾多のシミを作り上げていく。

「初にお目にかかります。私は………そうでした。まだ今回の名前をもらっていませんでしたっけ」

そのまま手に付いた血をペロリと舌ですくい取り、3人の前に出現した電子パネルに目を向ける。

「これはどうも。Eさん」

「Eさんなんて呼ばれる筋合いはないが。まずは話を聞かせてもらう」

そこにはクロノ、そして情報管理及び参謀のエイミイも映し出されている。

「いえ、あなたはGさんです」

「じ、ぢい！？Fでさえないのか！？」

「クロノくん！？今はそれどころじゃないんですよ！」

予想外の認識に動揺するクロノを、エイミイ——Eさん——が慌てて叱咤する。

せっかくのシリアスな雰囲気ぶち壊しだ。

「つと、すまない。おほんっ、取り乱した」

だがそこは、さすが執務官といったところか。
すぐに真剣な表情で話を戻す。

「この結界は君のものだな。いったい何の目的——」「おいおい」
だがそれも、もう1人の来訪者によって中断することになった。
その場の全員が動きを止める。

「いったいどういう状況だよ、これは」

神崎木葉、その人である。

特に焦った様子もなく、ごく自然にそこに存在していた。

「あ……え、なんで生きて？」

「いや、初対面から失礼すぎるだろ」

面倒くさ、と溜めていた1回分を無意識に使用し、何故かここにいる『聖祥レンジャー』を見つめる。

「とりあえず聞くぞ。今この状況は何だ？何で人が消えた？この変な空間を作ったのはおまえらか？そもそも――」

「え、えっと……そんな1度に言われても」

木葉の矢継ぎ早な質問にうまく対応しきれないのは。

フェイトやはやて、そしてクロノも展開の早さに思考が追い付いていない。

「来ましたか、Aさん」

そんな中、赤い少女だけは違った。

瞳はしっかりと木葉を捉え、離さない。

対して木葉は、それにただ訝しげに視線を合わせる。

「やっと、役者がそろいました。それでは言伝をお伝えします。きつと、Gさんの質問の答えにもなるはずです」

そのまま目を閉じ、台詞を思い出すように話します。

他の者はそれを、何をするでもなく見つめていた。

『【運命の歪曲者】^{ブレイク} 高町なのは

【造られた禁忌】^{クロイン}

フェイト・T・ハラオウン

【闇が溶けし力】（デッドライン） 八神はやて

そして、

【決定事項】（オールレディ） 神崎木葉

私たちは【管理局の管理者】と申します

率直に申し上げますと

あなた方の存在はこの世界の維持に対する反逆です
存在が罪なのです

よって、あなた方には初めから『なかったこと』になっていた
こととなりました

ご了承ください』

目を、開ける。

「つまり要約するとですね……………」

すっぱり、きっぱり、まったり、くつきり、しっかり、はっきり、
きっちり、

死ねよ」

「——っ」

色々ぶっとんでやがる。
木葉はまずそう思った。

不可思議な蒼白い空間。

『聖祥レンジャー』の妙な出で立ち。

空中に浮かぶパネル。

そして、赤い、紅い少女。

「それだけでも容量いっぱいなんだけどな」

加えて、少女は何と言った？

『【決定事項】（オールレディ）神崎木葉

死んでください』

「本当に、面倒くさい」

「……木葉くん？」

そして木葉を支配するのは、他の何でもなく。
怒りだ。

何をしたわけでもなく、おかしなことに巻き込まれた。
理不尽だ、と一言。

「この際、この状況に対する疑問はどうでもいい」

そして、

「そろそろ限界だ」

駆け出す。

疾走。

風を受けながら全力で踏み込む。

相手が子供だ、女だという認識はある。

だが、こんな状況を作り出したであろう者に対する配慮など、なかった。

軸の左足を踏み込んだ時には、もう少女の目の前に立っていた。

「まずは一発、ぶん殴ってや——」

が、その言葉が最後まで紡がれることはなかった。

気付けば進行方向とは真逆に、抵抗など皆無に吹き飛ばされていた。

腹部に痛みが走り、溜め込んでいた空気が吐き出される。

「あまり、私をなめないでください」

少女はその場から動いていなかった。

しかし、彼女の周囲には蒼い光が3つ、たゆたうように浮かんでいる。

その1つが、木葉の腹部へ投擲されたのだ。

「……なんだよ、それ」

肺の中の酸素を根こそぎ持っていかれた。
すぐに立ち上がれる状態ではない。

「先程は死ねと言いましたが、あれは間違いでした。訂正しましょう」

「私が、あなた方を殺します」

殺気——そんな言葉では言い表わせない。
毒気、といった表現が近いだろう。

目に見えない圧力に、なのほも、フェイトも、はやても動けずにいた。

辛うじて動くのは、口だけだ。

パネル越しのクロノは咄然の表情。

見た目10歳ほどの少女が、こんな気当てができるのか、と。

「なんで、こんなこと……」

「言いましたよね。あなたは反逆者です」

ゆっくりと、近づく。

「ならば、与えられる制裁は『死』なのですよ」

手を伸ばせば届く距離。

「世界にかわってお仕置きです」

そんな位置で少女は右手を天に掲げ、一気に振り下ろす——ことはできなかった。

瞬時に振り返り、自分に向かってきた何かをたたき落とす。

「おい。あんまり俺を、なめるなよ」

神崎木葉。

彼の周りには、少女と同じくいくつかの光が浮遊していた。先に少女に弾かれたのも、その中の1つ。

色は異なり、白銀。

「これ、俺以外にもできるやつがいたんだな。びっくりで固まっちゃったよ」

同時に、3人は少女からバックステップで距離をとる。

少女の注意が木葉に向かったからだろうか。

彼女たちの足は、すんなりと動いた。

同時に武器を構えるのも忘れない。

「びっくりしたんはこっちの方や。木葉くん、もう魔法使えたんやね」

「魔法？これが？」

「自覚はないんだ……」

はやての言葉に戸惑う木葉が少しおかしく、フェイトはこんな状況にも関わらず笑ってしまう。

「覚醒済み、ですか」

そんな中、少女は1度驚愕の表情を浮かべた後、何かを思案するように首を傾げる。

「『あの方』の話と少しずつれていますね……やはり、完成とは言いがたいですか」

何かが狂っている。

精巧に作られたはずの歯車が噛み合っていない。

そんな訝しげな表情。

それが何なのかは分からないが、今が好機だと木葉は悟った。

「たぶん、おまえらも同じようなことできるんだろ！？今のうちに、遠慮なくぶち込みまうぞ！」

白銀の光の数が増える。

その数5つ。

「クロノくん！」

「ああ。相手の戦闘意志は明白だな」

そして3人も、それぞれの光を生み出す。

なのはは桃色。

フェイトは金色。

はやては白色。

数は、実に木葉の3倍以上。

なのはにいたっては、数える事さえも億劫なほどだ。

「これより、戦闘による撃墜を開始してくれ」

残ったもの

――撃墜

急速で急激な展開に、頭が着いていかない。

ともかく。

体は動く。

戦闘、開始――

「中止ですね」

少女の周囲の空間を埋め尽くすように設置される様々な色の光を一瞥して、つぶやいたのはそんな言葉。

これには、その場の全員が動揺を禁じえなかった。

「聞こえませんでしたか？中止、と言ったのですよ」

動きが止まった木葉たちを見て、呆れたように肩をすくめる。
そして一番に動いたのは、やはり木葉。

「ふざけんな」

少女に向かって駆ける白銀。

それは問答無用に少女の意識を刈り取ろうと迫る。

「少々、うざいです」

しかし、白銀は当たるところか途中でその方向を変え、四方に霧散

してしまう。

「ここで消えてもらおうかとも思ったのですが、Aさんが魔法を使えるとなると話は別です。『あの方』に報告しなければいけないので。

……はあ、面倒くさい」

「——っ、俺の台詞を、パクんじゃねえ！」

怒り。

それはある意味、周りを見えなくさせる魔法。

新たな白銀を生成した木葉は再び少女へ投擲するが、結果は変わらず。

かすめることさえない。

「くそっ……おい！おまえらもやれ！」

最初とは違う木葉の激昂した声で、3人はようやく我に返る。

「う、うん！」

返事と同時、数十もの攻撃が少女を襲う。

壊れた花火のように光があふれ、目で追えないほどの速さで直進する。

が、それもまた届く前に方向を変えてしまった。

「うそっ!?!」

「無駄ですよ。私の魔法は少々特殊でしてね。空間を『歪める』のですよ」

このように、と右手を木葉たちに向け、一気に閉じる。

刹那、目の前の景色が文字通り『歪んだ』。

バットを額に当てて、100回ほど回った後のような感覚。立っていることすらできず、座り込んでしまう。

「こんな、ことって……」

「認識を間違えないでください。私は『逃げる』ではなく、『今回は引く』と言ったのです」

雨がさらに激しくなる。

少女にべつとりと付いていた血はある程度流され、それさえもドレスの模様のように滲んでいた。

「待て、全然答えになっていない！」

急いで止めるのはクロノ。

「君の目的がなのはたちの抹殺だとしたなら、普通ここまでしておいてあっさり引きはしないだろう。君の本当の目的は、別にあるはずだ」

齒がゆい。

パネル越しにしか発言できない立場に、クロノは激しくそう思った。

「そうですね。あなた方の抹殺は、【管理局の管理者】の最終目的ですから。」

今回の最優先は、他にありました」

少女の足元に、光が集まる。

光は円形の幾何学文様を型どり、そのまま体を包み込むように光が上昇。

「それは先程完遂しましたゆえ、今回は引かせていただくと言っているのですよ」

ドレスの両端を軽く持ち上げ、一礼。

それだけで絵になるように美しく。

「また、お会いすることは【決定事項】です」

そして、そして、

「今日は、これにて」

後には、何も残らなかった。

意図がまったく読めない事件だった。

なのは、フェイト、はやて、そして木葉にこれといった外傷はなし。

さて。

神崎木葉の保護は、事件の後すぐに行われた。

そのまま魔法関連の話——木葉の素質の話を伝えると、ふーん。とただ一言だけが返ってきた。

これから魔法の力とどう向き合っていくかは、彼の判断に委ねるつもりだ。

最後に。

今回の事件の損失を報告しておこう。

死亡者、二名。

神崎葉巻。神崎落葉。

これにより神崎木葉は、15歳にして天涯孤独の身となったのだった。

事件からすでに1週間が経つ。

それは、木葉が答えを出すまでの期間。関わるか否か。

それはどう考えても、短すぎる猶予期間だった。

ただ。

今のところ、毎日は相変わらず日常だ。

「ねえ木葉、放課後カラオケいかない？最近暇でさー」

それを象徴するように、木葉に対する南坂秀の態度に変化はなかった。

だからこれは日常。平凡。素朴な日々。

そう思ったかったのだが――

しかし、大半は違う。

『強盗殺人事件』

木葉の両親の死が表向きにはそう公表されたのが原因だろう。周囲から向けられるのは、好奇の視線だ。

「ひで、ちょっと来てくれ」

「あ……うん」

木葉は秀の提案に答えず、逃げるようにして教室を出た。呼ばれた秀もただそれに従う。

着いた先は、屋上。

そこには2人以外誰もおらず、周りの目を気にする必要のない場所だ。

泣きたいくらいに辛いんだろうな、と秀は思った。

両親が殺された時の感情なんて味わったことないが、かろうじて理解はできる。

だからこそ、親友である自分にだけは弱さを見せてくれるのだろう、

と。

「あのさ」

しかし。

「少し、やりたいことができたんだ」

「……………は？」

そこで告げられたのは、驚愕の言葉だった。

何のこと？とか。

両親のことは？とか。

そんな単純な驚きではない。

『あの』神崎木葉が。

小銭を落としても面倒だ、と拾わない木葉が。

電気を消すのが面倒だ、と明るいまま寝てしまう木葉が！
トイレに行くのが面倒だ、とその場で用を足す木葉が！！

……………さすがに最後のは想像だが。

「えっとさ、それ、何かの冗談？」

「…………いやまあ、そう言われても仕方ないよな」

久しぶりの晴天の空には似合わないため息。

秀は驚きを通り越し、逆に冷静さを取り戻した。

「それって、おじさんとおばさんに関係あるのかな？」

このときばかりは、秀が友であることを木葉は後悔した。
察しが、良すぎるのだ。

「そうなのかもしれない」

「そっか」

「何も聞かないのか？」

「説明するの、『面倒くさい』でしょ？」

「……………」

だが。

秀はやはり、親友だった。

誰よりも、何よりも、ただ向き合ってくれる。

「たぶん学校にはしばらく来れないから、ひでだけには言っところ
と思ってさ」

「うん。ありがと」

「おまえはお礼言われる側だろ」

「違っよ。あの木葉が、支えにしてくれるんだもん。僕は嬉しいん

だよ」

「……ここだけ聞いたら、結構危ない会話だよな」

木葉は笑った。

親友とは笑顔で別れたいと思ったから。

不思議と、面倒くさいとは思わなかった。

「がんばってね、木葉」

「ん、ちょっといつてくる」

決心したのは、力を持つこと。

それは、復讐などではない。

そんなことは考えてもいないし、考えたくもない。

ただ。

自分の中で何かが動いた。

関わってみるべきだという、大きな確信。

理由なんてない。

そう、思っただけ。

生まれて初めてのこの感覚に従ってみよう。

何かあれば、それから考える。

今はただ。

この空を飛んでみたいと思った。

真っ白なページに

意外と、おもしろい。

最初はただ面倒くさいと思っていた『新人研修』もとい『魔導講義』とにかく勉強嫌い、というか机に向かうのが苦手な木葉は当初乗り気ではなかった。どうして講義なんかを、とふてくされていたわけだ。経緯として、以下に1週間前の会話を記そう。

「ねえ、木葉くん」

「ああ、何だ高町」

「なのは、でいいよ」

「いや、どっちでもいいじゃん」

「……そうだね、関係なかったね」

「で、何だ高町」

「……………」

「高町？」

「……………」

「……何だ、なのは」

「あのね、」

「関係大ありじゃねえか」

「何で魔法使えるようになったのかなー、て」

「ああ。えっとな、夜中に目覚めたときに、電気付けるの面倒くさいなーって思ってたらさ」

「……出たの？」

「出た」

「宝の持ち腐れだよ」

「何となくだけど、自覚はしてた」

「えっと、それでね。今日から1週間魔法使用は禁止ね」

「あん？」

「私たちがちゃんと魔法について教えるから、それまでは禁止」

「お勉強ってことか？」

「うん。がんばろうね」

「……………」

「がんばろうね？」

「……うん」

なんてまあ、女の子と下の名前で呼び合う素敵イベントを消化しつつ、お勉強会が強行採択されたわけだが。

しかし、実際に講義を受けてみると思っていた以上に楽しい。

魔法の起源。

術式の相違。

戦術から時空管理局のことまで幅広く。

「といった感じで、今日でお勉強は終了です」

「はいはい。ありがとうございました、フェイト先生」

ともあれ。

実戦までの準備段階はこれにて閉幕。

あの少女の素性が詳しく判明するまでは研鑽を積んでおけ、というのがクロノ艦長からの通達だった。

「まあ基本的な戦い方は記憶してくれたし、後は実践で鍛えていこうね」

「そうなるな。そういや、なのはとはやては？今日は珍しくいなかっただけど」

講義程度ならわざわざ艦船アースラを使う必要はないとのことで、この1週間木葉はひたすらハラオウン家に足を運んでいた。塾のようなものだ。

「もう、忘れたの？ 木葉のデバイス調整だって昨日言ってたでしょ？」

——そう、デバイス。

魔法を使うにあたっての演算能力補助装置。

軽く魔法を使用するくらいならデバイスが無くともなんとかなるが、やはり戦いともなると高度で複雑な演算が必要不可欠になってくる。すべて、講義で教わったところだ。

「デバイスか。案外時間かかるんだな」

「それでも急ピッチなんだよ？ それなのに木葉がだだこねるから……」

当初、木葉には単に魔法を詰め込んでおく記憶媒体である『ストレージデバイス』が配給される予定だったのだが、なのはたちのデバイスを見た木葉が猛反発。

AIを含む『インテリジェントデバイス』を所望したため、否応なく時間がかかってしまった。

ちなみに『インテリジェントデバイス』はそう簡単に造れるものではない。

本来なら木葉の要求など瞬時に却下されるのだが、それでもクロノがしぶしぶ受け入れたのには、両親を亡くした、という木葉に対する

る同情が少なからず起因している。

「ちなみに、なんで『インテリジェントデバイス』が欲しかったの？」

「主には俺の代理人と、後は目覚ましとかに」

「最低だ」

艦船アースラ。

現在では時空管理局の地球支部のごとくなっている船の中に、木葉たちはいた。

「それでは。デバイスを与える前に、現段階までで分かったことを説明しておこう」

そう切り出したクロノの前には、例の少女の映像が映されている。

黒髪に、蒼い瞳。そして真っ赤に染まった純白のドレス。

あの時はそんな事を考えている余裕などなかったが、とても綺麗な顔立ちをしている。

「正直、【管理局の管理者】についての情報は一切ない。過去の事例も皆無だ」

ある程度承知していたが、見えない敵ほど怖いものはない。

最強と対峙するよりも。
不確定と対峙するほうがよっぽど。

木葉は軽く舌打ちした。

「あのよ、時空管理局ってのは言ってみれば世界を支配してる訳だよな？その管理者ってのは一体――」

「さあな。今のところ、ただの自称――「はったり」という線が有力だが」

苦々しい表情のまま肩を落とす。

一瞬の静寂の後、はやてがおずおずと手を挙げた。

「それやったら私たちを殺す、言うんはなん？『世界の維持』とか言ってたな。それは名前に合った言い草やったけど」

「すまないが、それについてもまったくだ」

3人の少女の雰囲気は重い。

それぞれ言われた事に対する思いがあるのだろう。

【運命の歪曲者】 ブレイク

【造られた禁忌】 クローン

【闇が溶けし力】 デッドライン

どれも過去と因縁深いものばかりだ。

「だとしたら、『分かったこと』ってのは？」

そして【決定事項】オールレディ、神崎木葉。

彼にはそんな事を言われても思い当たる節がないのか、飄々として
いる。

しかし。

「神崎葉巻、神崎落葉」

死を迎えた彼ら。

クロノから放たれた言葉には、軽い気持ちでなどいらなかった。

「検死の結果、君の『両親』は魔力を持っていなかった。

つまり、あの少女が言ったとおり『意図的に』結界内にとり残され、
殺害されたということだ」

それは、かすかな希望だった。

もし『たまたま』結界内にとり残され、『たまたま』殺されたのだ
としたなら、木葉にも諦めがついた。

運が、悪かったただけなのだから。

「それってよ……」

もし。

殺される確固たる理由があるとしたならば。

「俺のせい、ってことか？」

神崎木葉という存在が、悪かったということなのだろう。

「……上層部の君への対応は異質だった。さらに、今回の件で確信したよ。

君には、『何か』がある」

異質。異端。異能。異常。

両親を殺され得るだけの何かが。

「——っ」

不意に、耐えられなくなった。

なるべく、できるだけ表には出さないようにしてきた感情が、押さえ切れずに溢れた。

そしてただ、走った。

目的地などなく、どこか1人になれる場所を求めて。

「クロノくん！そんな言い方って——」

「僕だって好きで言ったんじゃない！事実なんだ！」

知っている。

その辛さを。

「……事実は、受け入れなければならない時が来てしまう。それは、早いうちに済ませておいたほうがいいんだよ」

なのは何も言えなかった。

目の前の青年も、理不尽な理由で父親を失った1人だから。だからこそ、その辛さが分かってしまう。

「私、木葉くんのところに」

「よせ、なのは。君が行っても慰めにはならない」

「……なんで？」

「今回の結界は『魔法関係者とその肉親』にまで対象範囲が広げられていたんだ。実際、君の家族も結界内にいた」

「うん」

「よく考えてくれ。今回、運が悪ければ君の家族までもが死んでいたかもしれないんだぞ」

「——っ!？」

「嫌な言い方だが、そんな賭けに『勝った』なのはが行っても……」

「で、でも……」

見ていられなかった。

もしくは、見ていたくなかったのだ。

1人の辛さは、なのはにも少しは理解できるから。

「なのは」

だがそこでなのはを止めたのは、意外にもフェイト。

「私に行かせてほしい」

「フェイトちゃん？」

彼女は、とても強い目をしていた。

「私にも、ちよつとは分かるから。木葉の気持ち」

「あ……」

かく言う彼女もまた、数年前に最愛の母親を亡くして、ずっと背負い込んできた1人だった。

「だから、行くね？」

「……うん。お願い、フェイトちゃん」

そんな彼女を、なのはとはやては心から信頼している。もちろん、兄であるクロノも。

だから、黙って彼女の背中を見送った。

対極の主従

走って、走って。

当てのないままに行き着いたのは、空が見える場所。

とは言っても艦船アースラは宇宙空間に存在するため、馴れ親しんだ空は真下にあるわけだが。

「ああ。何やってんだろぅな」

暗闇の中に光るいくつかの星々。

これもまた、空だと言えるのだろうか。

「……木葉」

そんな感傷的な背中に、小さな声がかけられた。

柔らかくて、暖かな。声。

「フェイト、か」

涙を流している訳ではなかった。

しかし。

必至で感情を抑えようとしている木葉はそれ以上に痛々しく見えた。

「ちょっと意外だな。なのはあたりが来るもんだと思ってた」

不敵に笑って。敢えておどけてみせる。

だがそれも、フェイトを心配させる要因の1つにしかならなかった。

「辛いときは、泣いてもいいんだと思うよ？」

「……………」

「なんてね。本当は、私も辛いのが我慢してるんだ」

お互い様ってこと、とフェイトも木葉に合わせるように微笑む。
そのまま木葉の隣に並び、暗い空を見つめる。

表面上だけでも笑っていたい。

それがただの、強がりだとしても。

「……【造られた禁忌】ってやつ。聞いても、いいか？」

「うん。いいよ」

木葉の率直な質問に、思わず本物の笑みがこぼれる。

普通なら聞いてはいけないようなことなのだろう。それくらいは木葉にも分かる。

しかし、今の2人にそんな上辺の遠慮は必要ない。

お互いに分かっちゃったから。

同じように悲しみ、苦しみを背負っていることを。

「私ね、生まれ方が普通とは違うんだ。木葉はクローン技術って知ってる？」

「ああ。……遺伝子技術だよな」

「母さんがその技術を完成させて、私を産んでくれた」

どこか遠くを見つめるような目。
悲しんでいるのか、それとも懐かしんでいるのか。

「理由が、あったんだろ？」

「そうだね。私は、死んじゃった娘の代わりだったんだ。なんだ、けど……」

「その子の代わりにはなれなかった、か」

「そうみたい」

しかしその目は、愛に溢れていた。
強い、想いで。

「だけどね、母さんにはすごく感謝してるんだよ」

返ってはこない過去。

それでも、涙は流さない。

自分だけ泣いてしまうのは卑怯だ。

「勝手に産み落とされて、勝手に嫌われてもか？」

「うん。それでも私は、私でいられるから。」

なのはに助けてもらって、はやてに出会って、リンディ母さんとクロノに家族になってもらって。

たぶん、今が幸せなんだよ」

綺麗だ、と思った。

同じ年齢だとは思えないような妖艶な雰囲気と、大きく澄んだ目をする少女に、木葉は息を呑んだ。

「だから木葉とも、もっと仲良くなれたらいいな」

「あ……ああ？、えっと、その……」

それは、願ってもない提案だ。

嫌な感じは、微塵もしない。面倒くさいとも思わない。

「うん。俺もだ」

だから、はっきりと。

共有したい、と思った。

苦悩も苦痛も、歓喜も悦楽も。

フェイトだけではない。

なのは、はやて、クロノとも。

こんな感情はなつかしい。

秀以来か。

「それならさ、より仲良くなるための第一歩としてな」

「うん？」

彼女たちになら、見せてもいいかもしれない。

隠してきた、弱い自分を。

「とりあえず、一緒に泣いとくか？」

こうして。

木葉とフェイト。

2人は少しだけ、近くなった。

暗幕。明転。

再び、アースラの一室に木葉たちが集まる。

「もう平気なのか？……というかフェイト、なぜ顔が赤い？」

「えー!? あ、いや……赤くなんか、ないよ?」

木葉と抱き合って泣いてたからです、なんて実の兄——ではないが、義理の兄にも言える訳がない。

「ま、まさか……木葉、貴様が!」

だがフェイトの反応は、逆にクロノに勘違いをもたらすだけだった。

その勘違いはなのはとはやてにも派生し、こちらも負けじと顔を火照らす。

「ふ、フェイトちゃん！私、そこまでお願いしたわけじゃ……」

「うわー、フェイトちゃんに先越されてもうたか」

やはりここは普通の子供中学生の反応。

つい先程までどんよりとしていた雰囲気が一気にピンク、と言うか混沌と化した。

「違うよ！ね、木葉。なんとか言って――」

「早くデバイスください、お義兄さん」

「みみみ、認めないぞー！」

シリアスも何もあったものではない。

そんな状態の收拾に数十分を費やし、フェイトの必至な説得でなんとか誤解は解けた。

――かに見えた。

「はあ、はあ……まあいい。いや、よくはないが、今はいい」

が、結局は問題を先延ばしにしただけのようだった。

「気を取り直して、デバイスを与えるわけだが。木葉、君はこの力を何に使う？」

話を戻して。

これこそが、最大の懸念。

あんな話を聞かされた人間のとる行動など、

「復讐を考えるか？」

おおよそ検討がつくからだ。

「はっ——」

だが。

耳にしたのは、嘲笑。

「クロノ、おまえは俺のことを分かってないな——まるで、分かってない」

出会ってもう1週間だ。

それだけあってまだ、俺のことを理解できていない。

「俺は復讐だろうが何だろうが、こう言うんだよ。」

『面倒くさい』

自分でやりたくないと思ったことは絶対にしない。そして今までの俺の人生、やりたくない事ばかりだった。

だから、何かを『した』ことがほとんどないんだよ」

木葉はこれまで、あらゆる事象から逃げてきた人間だ。
向き合ったことなど、皆無に等しい。

「そんな俺が、自ら関わりにきたんだ。なのにわざわざ復讐？」
そんなもの。

「面倒くさいな」

だから、それはただの杞憂に終わった。
終わって、くれた。

「……いいだろう。この力を何に使うかは、君の判断に委ねることにする」

逃げしか選択肢に持っていなかった木葉が、何かを感じ、魔法の力を得ることを選択した。
初めて何かを『したい』と思った。

だから、クロノは手に収められた銀の指輪を木葉に渡すことに躊躇わない。
それがクロノの、彼なりの信用の証。

「これが、デバイス？」

《yes, my load, please call my name》

木葉が指輪を受け取ると、それが合図のようにデバイスが起動する。

「名前……クロノ、こいつの名前って？」

「ああ、それならなのははやてが決めてくれたよ」

そうか、と後ろを振り替えると、少女たちが笑顔で迎えてくれた。

生徒と先生の関係ではなく、同じ魔術師の間になった。
3人は、それが心から嬉しかった。

「さっき、木葉くんとフェイトちゃんが出てた時にな」

「うん。勝手に決めちゃったけど、大丈夫？」

「平気だ。俺じゃ、ろくな名前を付けられないし」

そんな気がするよ、とフェイト。

なのははそれを確認し、木葉の腕を取って部屋を出ていこうとする。

「いこう、木葉くん！さっそく実践練習だよ！」

「あちゃー、始まってもうた。なのはちゃんの教導中毒」

なのはの代わりに、といった感じで、はやては木葉に手を合わせて謝る。

「いいさ別に。すぐに試してみたかったところだ」

「木葉、魔法のことだけにはやる気あるよね」

だけを強調するな、とフェイトを軽く小突きながら、なのはに引きづられて訓練室へ向かう。

「で、こいつの名前は？」

優しい彼女たちのことだ。

きっと素晴らしい名前を付けてくれたのだろう。

木葉の期待が高まる。

「うん。S t r a i g h t n e s s、愛称はストラス」

「へえ、ストライトネス……なんかカッコいいな。どんな意味なんだ？」

「和訳するとね、『真面目くん』」

「ただの皮肉じゃねえかよ」

ひとまずの糸口

「うーん」

開始から80分。

疲労で倒れた木葉を足元に、なのはは思案していた。

「特に秀でたところは、ないんだよね」

長距離支援のなのは、はやて。

近距離のフェイト。

2つのパターンに分けての適性検査だったのだが、どちらも芳しい結果は得られなかった。

「長距離で支援できるほどの魔力、というか体力は無いみたいやし」

「かといって接近戦でも体がついてこれてないよね」

手厳しい。

息絶え絶えになりながら、木葉は自分の甘さを認識した。

木葉の魔力は推定Aランク。

いきなりこの数値を叩きだすのはそこそ優秀らしいが、いかんせん、目の前の少女たちが例外すぎた。

何せ、始まりがAAA+とかなんとか。

ケタが違うどころか、格が違う。

「おまえらさ……手加減って知ってる？」

「あはは、ごめんね。少し休憩にしようか。フェイトちゃん、はやてちゃん、ちょっと」

もはや立つ気力すらない木葉を置いて、なのはは2人を手招きする。会話が、木葉に聞こえない位置まで。

「2人はどう思う？」

「さっきなのはちゃんが言ったとおりや。特に抜きでてる要素はあらへん……けど」

「うん。『目』が良すぎるよね」

フェイトの言う『目』はもちろん視力のことではない。

選別眼。観察眼。

常人では到底見切れないようなスピードの攻撃を、木葉は魔力付加なしで避けていた。

「違うと思う」

しかし。

話をふった当の本人はその考えを否定する。

「あれは『目』で見てやってるんじゃないよ」

「どういうこと、なのは？」

「実際、木葉くんは『目』では追いきれてなかった」

人間の視界は360度ではない。

当然死角というものが存在する。

が、木葉はそれさえもかわしてみせた。

「そやったら、勘で避けたってことか？」

「でも、それっておかしいよね。木葉はほんのちよっと前まで普通の中学生だったんだし」

眠っていた戦いのセンスが目覚めた、なんて話は漫画などでよくあることだ。

そんなことが、木葉に起きている？

なんて。

実際にはあり得ない話だが。

「あのね。これは私の推測なんだけど」

より声を小さく。

「木葉くん、最初は全然避けきれてなかった。でも、回を重ねるごとにかわす確率が上がってきてるの」

回避訓練は、ほんの十数分程度。

「たぶん、木葉くんは私の攻撃パターンを読んできてる」

たったそれだけの時間で人間1人のパターンが読めるとしたら。

「……かなりの切れ者ってこと？」

「本人に自覚はないみたいだけどね」

感心したように息をつくフェイトとはやて。

木葉のそれを見取ったなのはも、まだ信じがたいようだ。

「なら、オールラウンダーの策士って方向もありやね」

「うん。それならあの体力不足も補えるかも」

「本当に体力ないよね、木葉」

「……うん」

閑話休題。

育てる方向性が決定し、意気揚々と木葉のもとへ。

「さっ、休憩は終わり。次はもう少し本気でいくよ？」

「あん？さっきの、本気じゃなかったのか？」

恐怖の声色。

だが、それには何故か期待の声も混ざっているようだった。

「全然だよ？訓練用はかなり出力抑えてるもん」

抑えている？
あの強さで？

「つてことは……」

そして、木葉はニヤリと不気味に笑う。

「よし、一度本気で俺に打ってくれ」

と言いながら示すのは自分の腹部。

「ええ！？よし、じゃないよ！木葉くんはまだ魔力付加とかできないんだから、気絶しちゃうよ！？」

「いいから！——確かめたいことがあるんだよ。おまえらにもプラスになるぞ、たぶん」

かなり震えた声で言われても、説得力はないが。

「……もう！知らないよ！？」

「ちょ、なのは！？本当にや——」

時すでに遅し。

フェイトの制止もむなしく、半ばやけくそに光が放たれていた。

「うがんっ——」

そして期待どおりに命中。

奇妙な声を残して木葉は吹き飛んだ。

「ああ……なるほど………」

最後に意味深な言葉を置いて、意識は暗転。

「その……ごめんなさい」

目覚めると、そこは病室——という名の拷問部屋だった。
睨みをきかせてくる3人が果てしなく恐ろしい。

「あのね、この世界には無茶って言葉があるんだよ。知ってる？」

撃った本人がそれを言いますか、と思ったがもちろん口には出さない。

願いでたのは、木葉なのだから。

——それ以前に、言ったら地獄を見そうだ。

「重々承知してます、はい」

だから、ここは下手に刺激しない。

木葉の人生の中で幾度となく使ってきた手段だ。

「……本当に分かってる？」

「それはもう、神と仏に誓って」

神仏習合である。

そんな様子から大分懲りたことを感じ取ったのか、3人の表情が少し和らいだ。

「もう……射撃系の本気だったからよかったものの、砲撃系なら気絶じゃ済まなかったよ」

「あれより上があんのかよ……」

もしニュアンスを取り違えて『それ』を撃たれていたら、と思うとぞっとしない。

木葉は訓練室で倒れた後、そのままアースラの病室へ移送された。その際なのはクロノにこっぴどくお叱りを受けたので、今もまだ少しご機嫌ななめだ。

「あ、そういや聞きたいことがあったんだ」

「うん？」

そんなのはに代わって、フェイトが応じる。

「魔法の色のことなんだけどさ、フェイトは黄色、ってか金色っぽいだろ？」

「うん。そうだよ」

「あれって、人によって決まってるもんなのか？」

魔力光。

それは個々の区別認識にも使用されている。

「そうだね。本人の意志とは無関係に【決定事………決まってることだよ】」

「いちいち気にすんなよ。今更だろ」

「うん。ごめんね」

それは、2人が近づいた際に決めたこと。

互いに遠慮なく踏み込んでいこう、と。

「でも、それがどういう概念で、とかは分からないんだ」

なのはは桃色。

フェイトは黄色。

はやては白色。

そして、あの少女は蒼白い幻想的な色。

だからこそ、結界を構築した者とあの少女が同一人物だと断定できた。

「木葉は白銀、だよね」

「……ああ。へえ、そっか」

「それがどうかしたの？」

「いや、特には」

軽く思案する木葉が、どうも腑に落ちないフエイト。

そんな彼女を尻目に、木葉は勢いよくベッドから飛び降りる。

「よし。体に異常もないし、もうちょっと付き合ってくれるか？」

「ほんまに平気なんやろおな？」

「平気平気。なっ、ストラス？」

《all right. let's go》

そもそも、ストライトネスはまだセット・アップさえしていない。
1日体を実践に馴らしてから、だそうだ。

「あ、木葉くん！わざわざ気絶までした意味、ちゃんと教えてくれなきゃ！」

「そうだよ、木葉。私たちにもプラスになるってどういうこと？」

「ああ、それも平気。ちゃんと分かったから」

不敵な笑み。

それは、確信を持った者が見せる表情だった。

「例の少女の、強さの『ひ・み・つ』ってやつ」

「え!？」

例の少女、とはあの1週間前の人物だろう。
木葉の両親を殺した、あの少女。

「まずだな――」

だが。

それは急に鳴り響いたアラートの合図にかき消された。
目の前に、クロノを映したパネルが展開。

「1週間前と同じ反応が現れた。出られるか？」

「グッド、タイミングだ」

チェーンで首から下げていたストライトネスを外す。

初戦が実戦になってしまったが、なんとかなるだろう。
そんな甘い考えができるのは、少女の強さの秘密を知ったから。

「行こうぜ。実際に見せてやるよ」

再会のち、さよなら

白のアンダーシャツに、黒のロングスラックス。
そして全身を覆うのは、ローブのような黒マント。

西洋の貴族を想起させるような格好に身を包み、木葉はあるビルの屋上にいた。

木葉だけではない。

なのは、フェイト、はやて。

そしてもう1人。

忘れたくとも忘れられないあの少女が、今度は汚れ1つ付着していない純白のドレス姿で立っていた。

前回と同じ服装。

それが少女のバリアジャケットの様だ。

「お久しぶりです」

艶のある黒髪に、深い蒼の瞳。

何もせず、ただ木葉たちを待っていたらしい。
となると、今回の目的は――

「世界を、修正しに参りました」

殺気。

前回のように見逃してくれるつもりはないようだ。

対してなのはたちには、ある不安要素があった。

神崎木葉。

彼は、両親の仇を目の前に何かおかしなことを考えていないだろうか。

「名前」

しかし。

「あんたの名前、聞かせてくれるか？」

木葉はいたって冷静を保っていた。

「殺される相手の名前くらいは知りたい、ですか？」

「逆だな。初めて倒す相手の名前くらい知りたいんだ」

殺す、ではない。

倒すと言った。

それだけで、なのはたちには十分だった。

「無謀ですね。自分の弱さをまるで自覚していない」

そう言って、少女は微笑んだ。

それは皮肉だったのか、呆れだったのか。

どちらでもない、と木葉は感じた。

言うならば、なのはたちが浮かべる暖かい微笑みに近い気がしたのだ。

「いいでしょう。先日、今回の名前をドクターにいただいたばかりですしね」

そしてその笑みを瞬時に消し、無表情に戻る。

無機質、と言ってもいい。

そこからは何も感じられない。

「イリーン、と申しておきます。以後――後数分程度でしょうが、どうぞお見知りおきを」

だが、話の通じない相手ではない。

それが分かった木葉は、少し安堵した。

「なのは、フェイト、はやて。おまえらは後方から隙を見て支援してくれ。

まずは、俺が突っ込む」

「本当に分かったんだね？あの子の力の秘密」

「ああ」

自信たっぷりな木葉の言い方に、3人はしっかりと頷いた。しっかりと、信頼してくれた。

だから、思い切り走る。

イリーンのもとへ、一直線。

「まずは、前のお返しからだ」

いつの間にか木葉の右手には、標準よりも若干長めの日本刀が握られていた。

西洋の貴族服に日本刀。

このいかにもなミスマッチが、持ち主の性格を的確に表現している。向けるのは刃ではなく、もちろん峰。

「せっかく相談の終了まで待っていたのに、ただの突撃、否。突進ですか」

そして左の手のひらを木葉に向ける。
あの時と、同じように。

「実に、うざいです」

だが、形成されたものは違った。

ただの歪みゆがみではない。

それは歪みひずみに近い。

空間の、欠落。

「そこに空間は『存在』しません。疑似的なブラックホールのようなものとお考えください」

イリーンは笑う。

先程のような微笑みではない。
明らかに侮蔑の意が含まれる表情。

「触れれば、死にますよ？」

「——っ、木葉！」

フェイトの声。

止まって、と叫ぶ暇もなく。

「たあっ！」

刀を振りかぶりながら、
歪みの中へ、

木葉は消えた。

消えた。

と、思った。

少なくとも、3人は。

いや、ここは逆に表現するべきだろう。

残る『2人』は、木葉が死ぬはずが無いことを理解していた。

1人は木葉本人。

そしてもう1人は、イリーン。

人を、物を消すことのできる空間を作り出した――歪ませたはずの人物だ。

「くっ――」

しかし。

イリーンは、木葉にためらいがないと気付いた刹那、自分を守るように両手を交差させる。

「――せやっ！」

丁度そこへ示し合わされたかのように、日本刀――ストライトネスが直撃。

魔力で障壁が生成されるが、小さな体ではその衝撃は受け切れず、真後ろへ吹き飛んだ。

そのまま体はビルの一部に突進し、イリーンは瓦礫の山に埋もれてしまった。

それだけで済んだのは、しっかりとガードを作れたから。

では、なぜガードを作った？

木葉は歪みに触れたのに。
死んだずなのに。

答えは明瞭、明快、明白。

空間を歪ませる力。

そんなものは存在しないからだ。

先程の空間も、ただの――

「ただの、幻術だ」

空間歪曲魔法。

文字にするのは簡単だが、現実を表すとなると話が違う。

空間座標の掌握
空間位相の認識

この2つをこなした上で、空間に別の何かをねじ込む。

それが主な使用法だが、こんな芸当を人間が行うのはいささか力不足だ。

何もかもが、足りていない。
それこそが、欠如している。

「そんなめっちゃくちな奴が、魔力が少ない訳がないだろ」

木葉が『それ』にはっきりと気付いたのは、なのはの射撃を受けた

とき。

「あの時。本気で殺しに来てたはずのおまえの一撃を受けて、気絶どころかすぐに立てる程度の痛みだった」

瓦礫の中にいるはずのイリーンに話し掛ける。

ガードはしていたのだから、意識はあるだろう。

「そこで1つの仮説が推測された」

なのはたちは、まだ何が起きたか理解できていなかった。

「もしかしたら、魔力が少ないのを隠すための工作をしてるんじゃないか？ ってな」

だから、木葉の言葉に耳を傾ける。

一言も聞き漏らさないように。

「射撃があんたに届かなかったのは、不可視で広範囲のシールドを展開していたから。空間歪曲は幻術の類い。だと、したら」

瓦礫が、揺れた。

そのまま中から噴き出すように破片が飛び散り、中心にはイリーン。

「空間歪曲ってのは、安易に自分に近づかせないための『はったり』ってことだ」

綺麗だったドレスは無残にも切り裂かれ、見る影もない。

「本当の確信を持ったのはさっき。突っ込んできた俺に、『攻撃』

じやなく『待ち』を選択したときだけどな」

「……正直、びっくりです。死ぬ前に見破ったのは、あなたが初めてですよ」

客観的に考えれば、答えはすぐに出たかもしれない。
が、人間は恐怖に弱い。

空間歪曲、なんてものを目の前で見せ付けられてしまえば、普通は恐怖でまともな思考ができなくなってしまう。

思考の柔軟性。

木葉の長所であり、短所でもある性質が有利に働いた結果だ。

「すごい……木葉くん」

「……うん。その推理もだけど」

「そやな。普通、八割確信があっても突っ込める勇気がない」

度胸が座っている。

なのはたちは感心の表情だが、それは少し違う。

木葉は、自分の身の利害など考えていない。

生きていたら成功。

死んだら、それまで。

根本的なところで割り切っている。

「まあつまり、補助に長けた魔術師。虚偽の道化師とでも名付けて

やる」

「案外かっこいいのがショックです」

「つてことは、だ。それが見破られた以上、あんたに勝ち目はない」

「……………」

「おとなしく、負けといってくれねえか？」

そして――

弱いこと

「負けを認めろ、ですか」

下を向く彼女の表情は見えない。

だが、その声からは怒りの感情がひしひしと伝わる。

「甘い、甘すぎですよ」

「……は？」

気が付いたときにはもう、木葉の両腕は体の後ろで縛り上げられていた。

「木葉くん！」

「動かないでください。手元が滑ってしまいますよ？」

木葉の喉元には小型のナイフ。
それでも殺傷能力は十分すぎる。

「イリーン、どうやって……」

「どうやって？」

魔力付加を利用した瞬歩。

「ただ、動いただけですが」

それは魔導師としては一般的な技術であり、実際なのはたちには見えていたし、対処もできたはずだ。

だが如何せん、彼女たちからは距離があった。

そして木葉は弱い。

能力などとは関係なく。

実戦に、弱い。

「くっ——」

だからこれは、ただの木葉の実力、実戦不足。

相手の切り札さえ見破れば、と思っていた木葉の安直な考えが招いた結果だ。

甘い。

木葉が実戦を戦いぬくには、思考がまだ甘すぎた。

「木葉……」

木葉とイリーン。

なのはとフェイトとはやて。

2つの距離は20メートル程。

「それでは、ゲームでも始めましょうか」

そう言ってドレスの中から取り出したのは、木葉の喉元に当てられているものと同じ。

鋭く尖った。

鉄の、重み。

「的当てです。ただし一方的な、ですが」

右手のナイフは木葉の喉元。

左手のナイフは的に狙いを定める。

「動かないで、くださいね」

少しだけ右手を動かす。

たったそれだけの動作で、木葉の喉元から1筋の血が流れた。

それを視界に捕えたなのはたちは、迷うことなく各々のデバイスを下ろす。

「おい……何やってんだよ？仕掛けが露呈したこいつくらい、おまえらなら簡単に倒せるだろ！？俺なんかに構わ——」

叫ぶ。

たったそれだけの行為も、ナイフをさらに深く食い込ませるだけだ。

対してなのはは——

「できるわけ、ないよ」

と、絶体絶命の危機を向かえた状況にも関わらず、笑いかける。

「もう、木葉は私たちの仲間なんだよ？」

「まだあんまり役に立てへんけどな、——それでもや」

フェイトも、はやても。

いつもと変わることはない、暖かい笑顔。

そんな表情を前にしては、木葉は何も言うことができなかった。

ただ、自分の甘さと弱さを恨んだ。

「それでは、あなたから」

言い終わる前に、

「——っ」

小型のナイフはなのはの右肩に突き刺さった。

その箇所を中心にして、どんどん血がバリアジャケットを滲ませる。

倒れそうになりふらつき、寸前で持ち直す——と同時。

今度は左のふくらはぎに鈍痛。

「あ……くっ」

早くも立つことができなくなり、膝をついてイリーンを睨み付ける。

それを見たイリーンはすでに興味をフェイトに移していた。

瞬時に右足首と右腕が痛みに襲われ、力なく地面に向かう。

はやても同様に両足の痛みに耐えていた。

奴は俺を――

「いけるな？」

主人の声でストライトネスは木葉の頭の前まで飛翔し、

「なっ何を――」

「貫け」

そのまま、

《yes, my load（お望みのとおりに）》

大量の血が舞った。

「ぐっ――」

鮮血が一面に飛び散る中、ストライトネスに貫かれた者が鈍いうめき声をあげた。

木葉――ではない。

頭を貫かれれば即死。

それでもまだ声をだせる者など、いるはずが無い。

貫かれたのは、腕だ。

木葉を守るように覆った、イリーン（……）の右腕。

「――やっ！」

それを確認した木葉は、イリーンの血を浴びながら彼女の腕からストライトネスを無理やり引っ込抜き、そのまま腹部に蹴りをたたき込む。

今度はろくにガードもできず後ろに吹き飛ばされて倒れたのを一瞥。なのはたちの元へ走った。

「木葉、くん……平気、だった？」

「――っ、バカかおまえは！」

無傷の木葉。

致命傷では無いにしろ、出血の激しいなのは。

そんな状況でも他人を気遣えるなのはに、木葉は何とも言えない動揺を感じた。

「俺の、せいだろ……俺がこんな甘ったれた考えじゃなければ、俺がもっと強ければ！……せっかく信じて、任せてくれたのに」

責めてほしかった。

ただ自分を責めてくれれば、何も考えなくていい。

楽になれる。

こんな時にまで逃げ道を欲しがる自分に、木葉は嫌気がさした。最低だ、と思った。

だが。

「違うよ」

この3人がそんなことをできる人間ではない、ということを木葉は知っている。

「これは、私たちが弱かったから。木葉の責任じゃないよ」

「そんなこと——」

「私たちは、木葉のことを信じたんだよ？」

「……ああ。信じてくれた。なのに俺は——」

すぐに動けるような傷ではない。

しかし、それでもフェイトは立ち上がり、木葉に寄り添った。

「今もまだ、信じてるんだよ？」

「——！」

まだ。

それは、次に繋がる希望。

「なのはも、はやても、私もまだ信じてる」

「もちろんや、けど。私たちは支援できそうにない」

両足に怪我を負った彼女はなおさらだ。

だから、とはやてが続ける。

「頼んだで、木葉くん」

こんな自分でも。

足手まといにしかならないような自分でも、まだ必要としてくれる。

信頼、期待。

ならば、それに精一杯応えたいと思った。
これまでにないくらい強く、思った。

「……任せて、くれるか？」

「もちろんだよ」

木葉にもたれかかりながら、フェイトは再び地面に膝をついた。
思った通り、立っているのも辛いようだ。

「ちょっとだけ待っててくれ」

だから、木葉は1人。

「すぐに終わらせてくる」

腕の痛みに耐えるイリーンに向き直る。

「うん、待ってる」

言ったと同時に、3人はアースラの転送システムで回収された。すぐに治療を受けることになるだろう。

「ストラス、気付いてるな？」

《I got it. (もちろんです)》

しっかりと、ストライトネスを右手で握る。

突破口は見つけた。

後は、そこに向かう手段を見つけるだけだ。

「あいつは言葉とは裏腹に、俺のことを殺せない理由がある」

殺す、と散々言われた。

しかし、それについて不可解な点がいくつかあった。

初めて会った時も見逃した。

何者かへの報告を理由にして。

そして今回。

殺せる状況はいくつもあったのに、何故か時間稼ぎのように振る舞っていた。

なのはたちを倒し、木葉だけを連れられるように。

2つの事象から察するに、木葉には生かしておく何かしらの『存在価値』がある。

それはクロノも言っていたことだ。

だからこそ、先程は迷いなくストライトネスを自分に向けた。イリーンが木葉を庇うことを推測して。

そこで、推測は確定に変わった。

「だったら、それは利用するしかないよな」

《mission start（任務開始）》

最初から死なないと分かっていたれば、できることは幾らでもある。

「神崎木葉、ストライトネス——」

期待には、応えてみせよう。

「行くぞ——!!」

希望の色

木葉とイリーン。

2人きりの戦闘が始まってから、すでに10分。

「私があなたを殺せないと分かったから何でしょうか？　こうやって体力を削り取り、気絶させてしまえばお終いですよ」

木葉は常に防戦に回っていた。

イリーンが放つ射撃を、ただひたすら受け続ける。

「ぐっ——」

もう十数発は体に命中しているだろうか。

1つの重さが軽いにしても、流石に辛くなってきた。

《are you ready? (まだですか?)》

「……後少しだ」

それでも、避けようとはしない。

その場から動かず、かろうじて反応できる攻撃に障壁を展開するだけ。

そんな木葉を、イリーンは不愉快に思った。

「どうして避けない——いや、そこから動かないのです？　馬鹿にされている気分ですよ」

そして、イリーンが作り出した光は数十。
今までで最大の数だ。

「あなたは私の魔力量が少ないと言いましたね。それは間違いです」
「……」

「私は生まれつき魔力を練りこむのが苦手でした、一つ一つの威力は並に劣りますが……」

「……」

「魔力量だけなら誰にも負けません。質より量、というやつです」

木葉は終始黙って聞いていた。

——否。

聞いてすらない。

奥底深く、眠っているかのように思考を進めていた。

「そろそろ、終わらせましょう」

数十の射撃が木葉に向かう。

同時にではなく、時間差を着けて四方八方から。

「……よし」

いくつもの射撃を見据え、ようやく木葉が動いた。
深呼吸、そして足踏みを二回。

ストライトネスを右肩に添えて構えをとる。

「だいたい、『把握した』」

そして一歩。

前に踏み出したと同時に、1つ目のシューターを切り落とす。

生じた爆煙に乗じてもう一歩。

「――右」

避ける。

今まで受け続けてきた状況と一変。

すべての射撃を避けながらまた一歩。

「――上。右斜め後ろ。正面」

踏み出す速度は一步步上昇していく。

直前よりも速く。もう一分速く。

気が付けば、走りだしていた。

「なっ!?!」

イリーンは硬直する。

全て避けられたから、ではない。

全ての攻撃が、事前に読まれていたからだ。

「ストラス!?!」

《yes, my load》

そこに、隙ができた。

ただ振り下ろす、お世辞にも芸のある攻撃ではない。

しかし、手を伸ばせば届く距離にまで接近しているこの状況下では、最も有効な一手だった。

「やっ!!」

風を斬る感触。

ただ強く、精一杯の力で。

それは見事に、イリーンの負傷した肩へ衝突した。

「うぐあ——」

低いうめき声をあげ、イリーンは動きを止める。
完全に意識が傷口へ向かっている。

すかさず木葉は拘束——バインドを施した。

「……なんとか、成功だな」

理解に時間がかかってしまった、と嘆息。

瞬時思考【アーリーシンク】

なのはたちが名付けた木葉の能力。

相手の攻撃パターンを読み取り、そこに自らの憶測を織り交ぜ、次の動きを予測する思考能力。

簡易に説明してしまえば、頭の回転の早さだ。

木葉は、それがずば抜けている。

今回あえて受け手に回ったのも、正確で確実な一撃を叩き込むための布石。

パターンを読み切ることにのみ意識を集中していたからだ。

しかし。

「はっ——」

イリーンは嘲るように笑っていた。

「あなたごときのバインドなら、すぐに抜け出せます」

そう。

木葉にはまだ決定打がない。

イリーンを降伏させられるだけの、一撃が。

「あなたに私は倒せない」

「俺には、な」

木葉は空を見上げていた。

それに習って、イリーンは顔を上げてみる。

「――！」

そこには、光があった。

桃色。

金色。

白色。

よく見慣れた、彼女たちの色だ。

「流石にあいつらの砲撃を受けりゃ、あんたもただじゃ済まないだろ」

「あ……」

「あいつらが撃つのと、あんたがバインドから抜け出すの。どっちが早いか賭けてみるか？」

脱力。

なのはたちが戻ってくるのは、明らかな計算外。

すでに、戦いを続ける気力は無くなってしまった。

絶望の表情がそれを物語っている。

「私の、負け……」

そして。

再びのアースラ艦内。

いつももある部屋の1つ、医務室の扉が開かれた。

「あ……木葉くん」

「おう、待たせたか？」

何気ない挨拶と共に入室した木葉だが、いくつかの傷から戦闘の形跡が確認できる。

静かな医務室。

3つあるベッドは、全て少女たちによって埋まっていた。

「うん。ちょっと待ったかも」

意地の悪そうな笑みでフェイト。

軽い冗談を言えるあたり、そう酷い怪我ではないようだ。

「そりゃ悪かった。具合はどうだ？」

それでも、一応礼儀として尋ねておく。

何と言われても、自分のせいだという罪悪感は消えない。

「少し痛むけど、もう歩けるよ」

「そっか」

だが、謝りはしない。

心やさしい少女たちの気遣いを卑下してしまうほど、木葉も無神経

ではない。

「まあ、あれやな」

その意を感じたのか、はやてが明るい声でささやいた。

「初場所、初勝利おめでとう」

「初場所って、相撲のノリでいいのかよ」

病室とは思えないほど、とても穏やかな空間だ。

さっきまで戦ってたんだよな、と木葉は自分の中で再確認。

うん。

戦ってたな。

痛いし。

「勝利……って言っているのかな？ ちょっと、ズルしちゃった」

「ズル？」

少女、イリーンはあの後アースラの局員によって捕らえられた。
抵抗の様子もなく、拍子抜けするくらいすんなりと。

「ああ。おまえらの力を借りちゃったからな」

「……？ 私たち、何もしてないよ？」

「——いや、こっちの話だ。気にするな」

なのはと同様、フェイトとはやても首を傾げる。
しかし、問い詰めたところで木葉は何も話さないだろうことは分かっていた。

彼ほど分かりやすい性格の持ち主はいないだろう。

「ねえ、木葉」

「ん？」

「ありがとね」

「……ああ」

何の『ありがとう』だろう、と木葉は思った。

イリーンに勝ったことか。

無事に戻ってきたことか。

信頼に応えたことか。

どれでもいいや、と思考を停止。

何にせよ、礼を言われるのは悪い気分ではない。

「それで、あの女の子は？」

体を起こしながらなのはが尋ねる。

もう歩ける、というのは本当らしい。

「今はクロノが尋問中だ」

「……尋問」

「つつても、軽いお茶会のノリだよ」

お茶会、という言葉に3人がピクツと反応を見せる。
尋問と聞いたときよりも怯えている気がするのは気のせいか。

なのはが『リンディ茶……』と言ったのが耳に入ったが、とりあえず流しておいた。

触らぬ神にたたりなし、である。

「気になるなら見に行くか。もう歩けるんだろ？」

「え……でも、いいのかな？」

確かに、気になるところではあった。

散々殺すなどと言われ、異様な名前まで付けてきた少女に興味がないはずがない。

「言ったら、お茶会のノリだって」

もつとも、イリーンは終始不服そうな表情をしていたが。

「……うん。お話、してみたいな」

「決定だな。ちょっと待ってろ、はやて。車椅子取ってくる」

はやての怪我は両足。

流石に歩くのは辛いだろう。

はやての謝礼を背中を受け、木葉は席をたった。

「車椅子、か。久しぶりやな」

「そうだね」

くすっ、と笑いながらフェイト。

言っでは悪いが、はやてには車椅子が似合う。

長年乗り続けていたからだろうか。

皮肉なものだ。

「それにしても、だよ」

「……なのは？」

語り掛けるようにではなく、1人つぶやくように喋りだすのはに、フェイトは嫌な予感しかない。

「明らかに実力差があるあの子に勝ったってことは、やっぱり木葉くんは策士向き……となると、今後の練習メニューは――」

「あはは……完璧にスイッチ入ってもうたな」

はやては教導官モードに入ってしまった友人を見て苦笑い。

「木葉、御愁傷様……」

そしてフェイトは、新しい仲間の行く末を案じるのだった。

話の条件

「話さない？」

「ああ。少しも口を開かないんだ」

リンディとクロノは疲弊の表情。

人形に話し掛けるようなことを続けていたようで、当然といえば当然だろう。

「戦っている最中は、饒舌だったんだがな」

打つ手なし、といった感じでクロノは肩を落とす。

対してイリーンは無表情のまま、正座の体勢から動こうともしない。

「イリーンちゃん、お話聞かせてもらえないかな？」

なのはが話し掛けるも、結果は同じ。

まるで機械のようにまばたきを繰り返すだけだ。

しかし。

「……幾らだ？」

ピクリ、と。

ほんの僅かだが木葉の言葉に体が反応した。

「やっぱりか」

「こ、木葉、どういうこと？」

焦りながらフェイト。

木葉はいつも通りの面倒くさそうな表情で応じる。

「こいつの態度を見りゃだいたい分かる。『話さない』んじゃないで、『話せない』んだ。つまり、依頼者が存在する。

そいつとの関係が忠誠心なのか金銭契約なのかは分からなかったが……まあ、その反応は後者だろうよ」

なら話は早い、とイリーンの眼前へ。

「500円」

「……」

「800円」

「………」

「1000円」

「何からお話しましょうか？」

「案外安いな、おまえ」

基準は紙幣みたいだ、とクロノに通達。

即席の分析力と簡素だが効果的な交渉術を展開する木葉に、その場の全員が舌を巻いた。

瞬時思考。

木葉の能力を再認識。

「まずはイリーン、あんたのことだ」

「自己紹介でよろしいですか？」

「よろしいぞ」

「本名は明かせませんが、性別は女。年齢は11歳。『ある方』の依頼を受け、あなた方を殺しにきました」

Aさんだけは別ですが、と付け加えて。

「【管理局の管理者】ってのは？」

「存在しません。『ある方』にそう名乗れと言われました」

「その『ある方』ってのは誰だ？」

「言えません」

「なんで俺だけは特別なんだ？」

「言えません」

「なのはたちを殺す理由は？」

「……」

「聞かされてない、か」

そこで一旦質問を切り上げ、リンディとクロノに耳打ちをする。
イリーンはなのはたちに任せておいた。

「何か分かったのかしら？」

リンディとクロノは共に、木葉の思考能力を信頼するようになっていた。

だから先程の会話で、木葉が何かを掴んだのだろうと思ったのだ。

「ああ。うまく【交渉】できれば、イリーンをこっちに引き込めるぞ」

「引き込めるって、裏切らせるといふことか？」

「その通りだ」

確信を持った態度。

木葉はすでに決まったことのように話す。

「話を聞く限り、イリーンと『ある方』ってのに金銭関係以外の繋がりは無い。金で雇われた臨時傭兵って感じだな。

なら、ただ単にそれ以上の金をこっちが出してやりやいい」

「こっちがって……管理局が、か？」

「当たり前だろ」

「君が思っているほど、管理局の金は使い勝手がよくない……そんな簡単には無―「無理、とは言わせない」

クロノの制止をさらに制止。

「エース級魔導師3名の負傷、及び一般人2名の殺害。そんなやつから依頼主の因果関係も引き出せないまま、何も分かりませんでした。と上に報告するのか？」

「……………」

そこで、理解してしまった。

木葉の言う【交渉】が、イリーンとの間にあることを。

「金さえ用意できれば、イリーンから何でも聞き出せる。それは俺が保証してやる」

これは、木葉と管理局側の交渉。
引いては、クロノとリンディとの交渉だ。

「……上と掛け合ってみましょう」

「艦長！」

しかし。

そこに選択の余地はない。

「どう考えてみても、木葉さんの提案に分があるわ」

「いい判断だ、リンディさん」

木葉にとって、管理局の評価など正直どうでもいい。
なぜ自分たちを狙うのかにも興味がない。

ただ。

知らない気が済まないことが1つだけあった。

神崎葉巻。神崎落葉。

両親の死の理由だけは、知っておかなくてはならない。

なつたのだった。

なんとも、お金の力は恐ろしい。

それにしても、と木葉は思う。

もともと容姿がいいだけに、そうやって懷かれると単純に可愛らしい女の子だ。

補助魔法が優れているだけあってイリーンの腕の怪我はすでに完治に近いが、それでも罪悪感が残る。

可愛らしい女の子を刺した。

ひどいトラウマになりそうな一言だ。

「えっと……イリーン」

とりあえず、謝ろう。

うん。

それが一番だ。

「何でしょう、木葉さん？」

味方になるにあたり、イリーンはみんなを名前で呼ぶようになった。ちなみに提案者はなのは。

お金のためなら何でもします！というイリーンの返答には言いたいことが山ほどあったが、気にしない。

「その、腕のことなんだけどさ」

「ああ、これですか」

もう何ともありません、とぶんぶん振ってみせる。

「それでも、一応謝つてこうと思ってな」

「謝る、ですか？」

一瞬の思案の顔。

刹那、ぱっと明るい笑顔になった。

「慰謝料ですね!？」

「……………」

やっぱり却下。

謝るのなし。

つくづく、お金は恐ろしいと思った。

と、まあそんなことがあり、なんにせよ強力な仲間ができたのだった。

ただし、イリーンから情報が得られるのは短くても3日後。
リンディが管理局上層部に掛け合った結果、それが金の届く最短期

間らしい。

正式にお金を受け取るまでは話せません、というのがイリーンの主張。

なんともしつかりしたお子様だ。

ちなみに、その金額は天文学的。

全世界の管理局というだけあって、その膨大なスケールは計り知れない。

という訳で。

最低3日間の休暇が与えられた。

家でゆっくりだらだらしよう、と意気込んでいた木葉だったが――

「木葉くん、そっちの注文お願い！」

「あのさ、休憩って知ってるか!？」

喫茶翠屋。

なのはの両親が経営するこの店に、何故か従業員服を着た木葉がいた。

「――たく。さっさと注文しろよ」

ゴッン、と。

ぶっきらぼうに尋ねる木葉の頭を、なのはがひっぱたいて店の奥に

連れていく。

「つてえよ！急に殴るやつがあるか！？」

「だって全然接客になってないんだもん！」

「その前になんで俺が接客やってんだよ！？」

それはリンディの提案だった。

思考能力は目に見張るものがあるにせよ、性格にやや難がある木葉。せつかくの三日間を利用しない手はない、ということで作戦の決行が決定。

【木葉更正大作戦（仮）】

1日ごとに1人ずつが木葉を更正させていく、下手をしたら訓練よりも厳しいプログラム。

初日はなのは担当ということで、木葉は翠屋で接客のアルバイトに勤しむのだった。

「とにかくっ、基本は笑顔だからねっ！」

「……面倒くさ——」

「だから、ね？」

「……はい」

こんなことで木葉の性格が正常になるとは思えないが、【木葉更正大作戦（仮）】とは記されているとおり仮の姿。

実際には、心に負った傷を表に出さない木葉の慰安計画である。なのははその真の計画を忘れているのか知っていてか、どちらにせよ更正に尽力を尽くすのだった。

つかの間の休息。

ようやく訪れた安穩。

短い様で長い木葉たちの休暇は、まだまだ終わりそうにない。

一人と一人

孤独を求めていた時期があった。
孤独を得ていた時期があった。
ひたすら孤独に身を委ね続けて。
今度は、繋がりが恋しくなった。

「い、いらっしゃいませー」

笑顔。笑顔。

接客スマイル！

木葉の頭を支配するのは、そんな言葉だけ。

「ご注文などー、お頼みになったらいかがでございますかー？」

口調はつたない、というよりもはや日本語ではない。

よってなのは鬼の監視を逃れるには、とにかく笑顔しかないのだ。

「木葉くん、お昼の時間だよー」

そんな更正プログラムを耐えぬくこと約6時間。

朝9時から始めていた作業に、昼休みという名の休息が訪れた。

昼にしてはずいぶんと遅い時間だが、正午付近は喫茶店にとってかき入れ時なのだから仕方がない。

「とりあえずお疲れさまー。どうだった？」

「なのは、おまえはいつもこんな事やってんのか？」

脱力感。

それが言葉と態度の節々から感じられた。

「うーん。まあお手伝いするときはだいたいね」

「……尊敬するよ」

「にやはは、ありがとう」

素直に褒められて顔を赤らめるなのは。

サンドイッチとお茶。

そんな簡素な昼飯も2人で食べると美味しいな、と思った。

「それから、悪かったな」

「……なにが？」

「氣い、つかわせちゃってよ」

「なんだ。気付いてたんだ」

【木葉更正大作戦（仮）】

簡単に言えば、木葉に元気になってもらおうという計画。

その効果かどうか。

木葉は普段めったに見せない笑みを浮かべていた。

「こういうのは、素直に嬉しいもんだな」

「そう？ 私は『面倒くさい』んだろうなあって思ってたけど」

わずかに舌を出して、意地悪そうなのは。

そんな態度に、木葉はさらに笑う。

「確かに、面倒くさいな」

「えー、なにそれ」

不服そうに口を尖らせるなのはに、でもな、と木葉。

「ちょっと分かったことがある」

「うん？」

「面倒くさいイコール、嫌な事ってわけじゃないんだな、って」

きつと。

自分の人生は面白いものではなかったのだろう。

自分自身を客観的に見て、始めてそう思った。

面倒くさい事とは、決してつまらない事ではない。

こうやってコキ使われるだけでも、その中に楽しさが、嬉しさが隠れていた。

不思議と、嫌な感じはまったくしない。

「そう言ってもらえると、嬉しいな」

なのはがいてくれるからだろうか、と思った。

それはなのはが特別という訳ではなくて。

一緒に喜んで、一緒に楽しんでくれる誰か。

それだけで笑えるのなら、面倒くさい事も案外悪くない、と。

「木葉くんってさ」

不意に、名前を呼ばれた。
いつになく真剣な表情で。

「フェイトちゃんのこと、好きだったりする？」

「……何でそう思う？」

「あの時から、雰囲気で。なんとなくだけどね」

あの時。

それは少し前の話。

2人で共に泣いた、あのことを指しているのだろう。

「どうだろうな」

「私、結構真剣だよ？」

「……いや、別に茶化して言ってるんじゃないさ」

分からなかった。

確かに、フェイトのことは気に掛けている。

しかし、それが――

「好き、に繋がるのか分からない」

自分に似た境遇に親近感を持ったのか。

同情を抱いたのか。

純粹に、好意なのか。

つまり、そういうこと。

自分の中で整理がついていない。

「だけど」

これだけは言える。

「あいつみたいな奴は、嫌いじゃない」

嫌いじゃない。

その逆は、好きなのか。
どちらでもないのか。

「そんなの、ゆっくり決めればいいだろ？」

「……そうだね」

納得、といった感じで立ち上がる。

彼らには時間がまだたっぷりと残されている。

明日も、明後日も繋がっていく。

人はそれを、希望と呼んだ。

「まだまだお客さんは来るからね。がんばろっ」

「はいはい」

それでも。

面倒くさいことに変わりはないな。

と、いつもと同じように木葉はため息をついた。

いつもと違ったのは、1つの想い。

明日を楽しみだと思えた、大事な想い。

休暇2日目。

翠屋での疲労を足腰に溜めながら、木葉は八神家に到着した。

「料理を教えたる！」

というのが、昨日電話での開口一番。

何でも、（自称）料理の鉄人であり、（自称）天才シェフも真っ青だそうだ。

たぶん。

それは両親を失った木葉に対する隠れた気遣いなのだろう。

だが、それがまったく隠れていないことにはやては気付いていない。暖かさが、滲み出てしまっている。

「んー、足腰が痛い」

昨日より疲れなければ何でもいい、と思った。

翠屋の忙しさは異常だ。

その上、いつの間にか突如現れたイリーンに奢らされるという始末。

とことん面倒くさい。

「つてことで、さっさと始めようぜ」

「何で気付いたら座ってんねん！？」

許可を得てから上がらんかい、とはやて。

いきなり現れた木葉に余程驚かされたのか、胸に手を当てて呼吸を整える。

「こっちは疲労満タンで来てんだよ。もつといたわれ」

「人の家で態度でかすぎや……」

ラフな格好にエプロン。

普段とは違った自然な服装は、一段とはやてを魅力的に見せている。下準備はすでに出来上がっているらしく、文句を言いながらも木葉を立たせて台所へ連れ出した。

「へえ、結構本格的な感じで」

「当たり前や。万年1人暮らしを舐めたらあかんで」

「……だな。悪い」

「謝ることやないて。それに、木葉くんも1人暮らしのお仲間入りや」

「ああ。——ははっ、そうだった」

決して、笑いながらするような話ではないのだろう。

だが。

はやてとならそれができる。

どんなことでも明るい笑顔で、吹き飛ばしてくれる。

そんな所も、彼女の魅力の1つなのかもしれない。

「せやけど、今はちゃんと家族がいるんよ？」

「ん。ヴォルケンリッター、だったか？」

はやてに手を添えてもらいつつ切るのは人参。

「そや。今は長期任務でみんな出てるんやけどな」

「管理局も、人使いが荒いよな」

茶色の固形物があるところから、メニューはカレーで間違いないだろう。

いくらでも作り置きができる、1人暮らしには嬉しいメニュー。

「まあ、私たちは罪滅ぼしも兼ねてるところがあるからな」

「……万引きとかしちゃった？」

「あっはっはー、どついたらるか？」

目がマジだ。

笑ってるけど目がマジだ！

危機を感じた木葉は黙々とじゃがいもに向かう。

その手つきを訂正するように、再びはやての手が木葉に伸びた。

「聞きたいんやろ？」

「おまえが言いたいんだろ」

「んー、まあそやね。木葉くんには聞いといてほしいかな」

闇の書事件。

管理局のデータベースにはそう記されている、はやてと4人の騎士、そして現在の親友との出会いのお話。

ほとんどはやてが話していて、木葉は相づちを打つ程度。それでも話の節々には興味津々に食い付いてくる。

「なのはとフェイト、そんな頃からぶっ飛んでたんだな……」

「そやねー。イリーンちゃんほどでもないけどな」

「あいつを引き合いに出したら誰でも一般人だろ」

殺戮金好き少女イリーン。

ものすごい濃ゆいアニメが作れそうだ。

「まあ色々あったけど、今は幸せですって話や」

はやてには悪いが、木葉は少し安心した。

誰でも辛くて、痛い過去を持っていて。

それを乗り越えて幸せな人間が周りに存在していることに。

なのは然り。

フェイト然り。

はやて然り。

クロノ然り。

イリーンも、そうなのだろうか。

今度じっくり聞いてみよう、と思った。

後は鍋で煮詰めるだけ。

2人のカレーは、もうすぐ出来上がる。

すでに日は暮れ、涼しく心地よい風が舞うころ。

2人は食卓に座り、過去話を一旦打ち切る。

「それでは、木葉くんの料理人デビューを祝ってー」

「ほとんど手伝ってもらったけどな。乾杯」

キンッと鳴らされたグラスの中身は牛乳。

少しばかり雰囲気欠けるが未成年では何も言えまい。

「いやいや、初めてにしてはよーやったと思うで？」

「なら、よかった」

周りが優しい人間ばかりなのは、何故だろう。
自分は逃げてきただけの弱虫なのに。

——たぶん、補い合っているのだろう。
埋め合わせるように。

凸と凹。＋と－。

弱いから、強い意志たちが集まる。

そんなことを考えながら、まずは一口。

「……うまい。」

何だこれ、すっげえうまい！作り方は普通だったのにうまい！？」

とりあえず、うまいを3連呼。

語彙の乏しさは勉強量に比例している。

「そら、私の愛が存分に含まれてるからな」

「……冗談？」

「うん。冗談」

「ちくしょう散れこの野郎」

「野郎やないもん」

そこまで絶賛されては、はやても照れてしまう。
軽い冗談は、その照れ隠し。

「木葉くん、期待してもた？」

「……うるせーよ」

「もー、浮気したらあかんよ？」

「浮気って、誰にだよ？」

「フェイトちゃんに決まってるやろ」

またその話か、と木葉は嘆息。

そんなに分かりやすいのだろうか。

「昨日なのはにも言われたんだけどな……」

と、そこからは昨日と同じ話。

この調子でいくとクロノやリンディ、イリーンにも知られている可能性もある。

そうなる就非常にまずい。

「あんな——」

そして。

木葉が話を終えたとき、はやてから返ってきた言葉はなのはそのそれとは違っていた。

「あほか」

「なっ——何だよいきなり」

心底呆れた、といった表情。

それは木葉にか、木葉の言葉で納得してしまったのはにか。

「つまりあれやろ。自分の気持ちを知るのが怖い、と。少女マンガの乙女かあほ」

「またっ——2回も言いやがったな!？」

「何回でも言うたるわ。木葉くんのおほ。……フェイトちゃんの気持ちもちゃんと考えたらな」

「あん? フェイトのって……」

「フェイトちゃん、ものすごい奥手なんよ?」

「いや、知ってるよ」

フェイトの奥手な性格は、現代では希少価値なほどで。

あまり馴れない相手には自分の意見を提案することも躊躇う。

木葉には、少しずつ心を開いてきてくれたのだが。

「そんなんで、いつまで気持ち分かれへんって言い続けるんや? 木葉くんから歩み寄らな、逃げてるだけやと何も変わらへんよ?」

「俺から、か」

また逃げるのか。

はやては木葉とフェイトを思っただけの発言だろうが、木葉にはそう聞こえてしまう。

今までの生き方。

俺はそれを否定すべきなのだろうか、と。

「正直、怖いのかもな」

「自分の気持ちを知るの？それとも、フェイトちゃんの答えがか？」

「どっちも、だよ」

木葉が自分から本音を語るのはめったにない。

だからこのことは、木葉にとってそれほど大事なこと。

「まあ、フェイトちゃんもやけど。木葉くんも超がつく鈍感やからな」

「そんな自覚はなかった」

よほど美味しかったのか。

2人のカレーは話の最中でも減り続け、ごちそうさま。と同時に手を合わせる。

「言いたいことは色々あるけど、とりあえずありがとな、はやて」

「ええよ。今日は早よ帰って明日に備えてな」

「……まあ、それについても色々考えてみる」

「うん」

玄関先。

木葉は余ったカレーを半分もらい、帰路につく。

そして、残された者。

「木葉くんと、フェイトちゃんか」

1人になったはやては一言。

「お似合いやと思うんやけどな」

そんなつぶやきは夜風に乗って。

すっかり冷えた闇空に消えた。

過去の罪

人生、山があれば谷がある。

どこかで登ればどこかで降りる。

どこかで降りればどこかで登る。

そういうふうになっっている。

だから。

幸運と不運は、人生で総計するとプラスマイナスゼロになるらしい。

だとしたら。

そろそろ私にも、幸運が訪れてもいいのではないか。

真っ白で、雪のような花びらが絶え間なく舞い続ける世界。

第3管理世界。

アレイトリーシャ。

とても穏やかで、人も少ない世界。

その中でも極地——まったく人影のない広場に、少女が佇んでいた。

「ただいま、帰りました」

白いドレスが映える少女。

イリーンは、静かに地面に膝をついた。

「パパ、ママ」

イリーンの前には2つの墓石。

しかしそれは墓石と呼べるような立派なものではなく、単に石を積み重ねて作られたものだった。

それぞれに名前が彫られているのだろうが、拙い文字で書かれたそれを読み取ることができない。

「帰ってきて、しまいました……」

故郷に辛い思い出しか持っていないイリーンは、今さら帰って来たことを後悔した。

それは、5年前の記憶。

アレイトリーシャ。

この世界に、ある一つの村があった。

「いつも悪いねー、ちゃん」

「えへへ、困ったときはいつでも言ってねー」

彼女がまだ6歳の頃。

今となっては忘れてしまった、本当の名前を持っていた頃。

魔力量が大きく補助魔法に長けていたイリーンは、その集落の小さ

なお手伝いさんとして可愛がられていた。

「■■■■ちゃん、この荷物を運ぶのを手伝ってくれるかい？」

「うんっ、今いくねー」

村の人々はあらゆる場面でイリーンを必要とし、彼女自身も無償のお手伝いを楽しんで行っていた。
人の助けになること。

幼いながらに、それは彼女にとって大きな生きがいとなっていた。

「パパ、ママ。ちょっとお出かけしてくるー」

「今日もお手伝い？」

「うん！」

「そっか。気をつけてね」

「うんっ！」

そんなイリーンと両親。

3人はごく普通の、しかし幸せな家庭を築いていた。

いたの、だが。

「ねえ！最近■■■■ちゃんのお手伝い料が高すぎるんじゃない？今日
日はこれ以上値段を上げないよう、お願いしにきたの」

ある日急に家に押し掛けてきた村の人々によって、イリーンに衝撃の事実が露呈した。

今まで無償のお手伝いとして自分がやってきたこと。
村のみんなの笑顔が報酬だと。

そう信じてきたことを、いとも簡単に覆されたのだ。

「何言ってるんだ。うちの物をそんな安い金で使ってもらっちゃ困るんだよ。払えない奴に、コレは一切使わせない！」

物。

コレ。

自分の子では、ないのか。

優しい家族。

そんなものはなかった。

すべてただの幻想で、虚偽だった。

その日から、両親の彼女に対する扱いは豹変した。
本性が露呈してしまった今、『自分の物』である彼女に気遣う必要が見出せなかったのだろう。

自分を物として扱われ始めたイリーンの心境は、とても表現できるものではない。

自分の部屋に閉じこもる日が極端に増えた。

悪い夢なんだ、と何度も自分に言い聞かせた。

そんなことがあって以降。

見せかけだけで繋がっていた家族は、ひどくあっさりと崩壊に向か

った。

細い糸がぷつり、と切れるように。

心を閉ざしたイリーン。

使えなくなった所有物に苛立つ両親。

そんな関係がいつまでも続くはずはない。

いきなり入ってこなくなった金への欲望が、両親の間にも亀裂を入れた。

前触れもなく始まったのは、夫婦喧嘩などではない。
もはや、殺し合いだった。

私のせいだ、とイリーンは思った。
思ったから、父と母を止めに入った。

……はずだったのに。

残されたのは、2人の血に打たれたイリーンただ1人。

どうして、魔法を使ってしまったのだろうか。
どうして、力加減を間違えてしまったのだろうか。

どうして、……

「親殺しの私に、墓を参る資格なんてないのでしょうが」

辛い過去を想起しながら、イリーンは一輪の花を添える。

綺麗な、蒼色の花卉。

母から受け継いだ、瞳の色。

「パパとママに、お伝えに来ました」

両親を失ってから今までのこと。

それから、これからのことを。

「不思議な方たちに出会いました。お金よりも大切なことを、教えてくれるそうです」

イリーンを初めて墜としてくれた人たち。

繋がりが大切なのだと教えてくれた人たち。

「私は、それに興味があります」

ずっと昔に忘れてしまった、大切な気持ちに。

言いながら、笑った。

それは家族に向ける、優しい笑顔。

「パパとママが見つけれなかった何か。それを探しに行ってください。」

木葉さんたちと、一緒に」

立ち上がる。

その目に、迷いはない。

「それを見つけれられたなら、また会いに来ますね。今度はたくさん
の花束を持って」

それでは、と言い残し歩を進める。

無理を言って外出させてもらったのだから、早く戻らなければ。

その時。

一陣の風が白い花を一斉に揺らした。

イリーンの耳は、それを確かに捕えた。
がんばって、と囁かれた微かな声を。

——ただの幻聴だったのかもしれない。

しかし、そんなことはどうでもいい。

はい。

と風に返事をする。

彼女の瞳からは暖かい光がこぼれた。

2人の距離

一歩だけでいい。

その一歩を踏み出せる勇気が欲しくて。

そうすれば、手の中に収まる気がしたから。

海鳴市から少し離れた市街地。

そこには少しばかり名の知れた待ち合わせのスポットがあり、その前に立つのは金髪の少女。

そして、少女の横で両手を合わせる木葉の姿があった。

「本っ当に悪い！」

木葉を待つこと1時間。

寝坊というなんの個性もない遅刻の仕方をやってみせた木葉に、彼女は怒るでもなく微笑を返した。

「木葉、ちょっと変わった？」

「……へ？」

予想もしていなかったフェイトの反応に、木葉は呆然と顔を上げる。

「初めて会った頃の木葉なら、『遅れた、起きるの面倒くさかった』とか言ってたよ。きっと」

「……そんな嫌味な奴だったか、俺？」

そうだよ、と今度は苦笑。

「でも、変わってないところもあるね」

「……例えば？」

「遅刻してくるのは、予想してた」

とりあえず今までの生き方を反省した。
もう寝坊はしない、と心に堅く誓って。

「お詫びに昼飯は奢らせてもらうよ」

「うん。ありがとう」

そして。

そういうフェイトも変わった、と木葉は思った。

出会った頃はここまで心を開いてくれなかった。

今だって、遠慮せずに『うん』とは言ってくれなかっただろう。

休暇3日目。

この日フェイトは木葉をお茶に誘った。

ゆっくりと休日を過ごしたい木葉には素晴らしい提案であり、喜ん

でいたのだが。

——単純に、寝付けなかった。

なのはやはやてに核心をついた話をされた結果、柄にもなく緊張してしまったのだ。

そんな状態が一晩で消えるはずもなく、どこかぎこちない動きでフエイトと並ぶ。

「で、これからどうするんだ？」

「ここからちょっと行った所にね、静かな雰囲気のお茶店があるんだ」

カジュアルな黄色のワンピースに調和した金髪をなびかせながら、木葉の手を引く。

「——っ」

別にやましいことを考えていた訳ではない。

が、妙に意識してしまっている女性に手を握られた木葉は、その熱を帯びた手を振りほどいてしまった。

「あ……」

フエイトは木葉の赤くなった顔を見て、自分のとった行動の意味を理解。

「い、ごめんっ」

それが今さら恥ずかしいことだと思い直したのか、フェイトも顔を真っ赤にして下を向く。

「い、いや……その」

——フェイトちゃん、ものすごい奥手なんよ？

なぜかこの時、急にはやての言葉を思い出した。

——木葉くんから歩み寄らな、逃げてるだけやと何も変わらへんよ？

他人になかなか行動を起こせないフェイト。

そんな彼女がここまで心を開いてくれているのに。

また俺は、逃げようとしてるのか？

そう思った時にはすでに、体が動いていた。

「あ……」

所在なさげに行き場のなくしたフェイトの手を取り、何事も無かったかのように再び歩きだす。

「こ、木葉、あの……手」

「嫌か？」

「え……う、ううん。そんなことない」

「じゃあいいだろ。こっちだよな？」

暖かい、とフェイトは感じた。

ぎこちなくて、ぶっきらぼうなのに、優しい手。

そんな木葉の手に引かれて、フェイトは心地よさそうに目を細めた。

「うんっ」

ぎゅっと。

強く、もっと強く握り返す。

その分だけ、暖かさが増す気がして。

自然と、2人の口が緩んだ。

「あそこの喫茶店で一番高いのって何だったっけな？」

「……俺の財布には限度があるからな」

「ケチ木葉」

「うるさい」

こんな何でもない会話でも心が弾む。

フェイトだからかな、と木葉は思った。

木葉だからかな、とフェイトは思った。

お互いに。

お互いの存在が大きくなりつつある今を感じていた。

静かに音楽が流れる穏やかな喫茶店。
その席の1つに、2人は向き合って座る。

「ねえ、木葉」

軽い昼食としてスコーンを取りながら、フェイトは向かいに呼び掛けた。

「私たちの間では、お互いに遠慮はしないって言ったよね？」

「ああ、言ったな。確かに」

2人の約束。

あの時、あの場所で誓ったこと。

「じゃあ聞くけどね。最近、無理してない？」

「無理、って……何のだよ？」

「あの子、イリーンのことだよ」

フェイトが話をしたかったのは、つまりそういうこと。

復讐に興味が無いとは言っても、目の前に両親の仇がいるのだから。普通なら気が気でないはずだ、と。

お互いに遠慮しないと制約したからこそ、前触れもなく核心を尋ねられる。

そんな関係も、木葉がフェイトを気に掛ける要因の1つでもあった。

「憎くないのかってことか？」

「……うん。あんまり、こういう言い方はよくないんだけど」

言い淀んだのは、イリーンのこれからに関わるから。

何だかんだといって、フェイトがすでにイリーンを仲間だと認めている証拠だ。

「あの子は木葉の両親を殺したんだよ？」

果たしてフェイトはそれを自覚しているだろうか。

「それなのに木葉は無頓着っていうか……何を考えてるのか、全然分からない」

それが怖いんだ、とフェイトは言った。

抑えつけていたイリーンに対する憤りが、いつか溢れだしてしまうのではないかと。

そんなフェイトに、木葉は困ったように語る。

「何て言うかな……あいつは、仇じゃねえよ」

「仇じゃ、ない？」

「金で動かされてただけだろ？」

「でも……それでも、だよ」

割り切っている。

それは木葉が有す特殊な思考回路であるがゆえに、普通に考えると筋道を通らないことがある。

殺したのはイリーンだ。

というのが、一般的な帰結だろう。それが非合理的であったとしても。

「まあ、確かにそうなんだけど——例えば、だ。子供にお使いを任せる親がいたとして、子供にお駄賃を渡すだろ？で、その子は言われたとおりに買い物をしてくる」

「……うん」

「子供はお駄賃っていう利益はあるけど、『買い物』として損得をするのは親だけだよな？」

ってことは、そこでの目的達成はすべて親の側に果たされるって事」

つまり仇はイリーンではなく、依頼主であると。

「仇なんて小難しいことは、そいつに会ってから考えるよ」

当たり前、といった感じで堂々と語る木葉。

フェイトはそれを見て、重く考えすぎていた自分が馬鹿らしくなった。

ああ、いつもの木葉だ。

独自の思考で物語を作っていく、いつも通りの木葉だ、と。

頬が緩む。

どうして木葉の言葉には説得力があって、安心感があるのだろうか。

言っていることは、かなり滅茶苦茶なのに。

「そういう根本的な所は、やっぱり変わってないね」

「満足したか？」

「うん。充分だよ」

屁理屈で臍曲りで。

そんな木葉も、好きなんだ。

好き——と。

フェイトはここで自分の気持ちを認識した。

「あのね、木葉」

「うん？」

私は、木葉が好きなんだ。

一緒にいると落ち着くのも。

安心できるのも。

もっとたくさんお話がしたいと思うのも。

好き、だから。

「ずっと、仲良しでいようね？」

だけど。

今は、このままでいい。

このままの関係で、このままの距離感で。

徐々に歩いていけば、いつかきっと――

そして木葉も。

思うことはフェイトと同じ。

フェイトが好きだ、と。

だから。

「もちろん」

躊躇うことなく。
力強く、うなずいた。

その夜。

クロノから連絡が入った。

管理局本局からの届け物。

紙幣の重み。

スーツケース数百個。

イリーンの休日

「暇ができてしまいましたね」

ここは海鳴市。

風が穏やかに流れる晴天の中。

私、イリーンは散歩中です。

「いいお天気ですねー」

こんな日は、思わぬ幸運が舞い込んできたりするものです。

主に、お金とか。

それにしても。

のんびりと過ごすのは、実に久しいです。

愛しいお金のためとは言え、くる日もくる日も人殺し。

そんな日々からは考えられない、ゆったりとした時間。

「私には、少し勿体ないですね」

私に、こんな日々を過ごす権利があるのでしょうか。
たくさんの人を殺して、それでも。

今が楽しいと思ってしまうのは、罪なのでしょうか。

「……はあ」

楽しい気分から一転、憂鬱な表情。

「――止めます、止め！今日はせつかくの休みなので、楽しいことを考えましょう！」

主にお金とか！

ぐるるっと、お腹から何とも言えない叫びが聞こえてきます。

「……ま、まずは、腹ごしらえですね。うん。」

腹が減っては戦ができません。

という訳で、丁度いいところにあった喫茶店に入ることになりました。

「い、いらっしやいませー」

「……あれ？」

どこかで聞き覚えのある声。

やる気を感じられない、無気力な声。

「木葉さん？」

「げっ、イリーン！？」

しまった、と視線を反らす木葉さん。

そんなことしても、見てしまいましたよ。

精一杯作りましたー、って感じの引きつつた笑顔。

「何やってるんですか、金ヅルさん」

「なんか今妙な単語が聞こえたぞ!？」

「気のせいじゃねえし昇格してる!？」
「もう、うっさいですねー。
私はお腹が減ってるんですよ。」

「勝手に席で待たせてもらうので、何か美味しいものを持ってきてください」

まだ何か叫んでいる金ヅル——木葉さんを置いて、とりあえず席に。
少し待っていると、すぐにオレンジジュースとサンドイッチが運ばれてきました。

「って、なのはさんまで」

「にやはは。ここ、私の両親が経営してるからね」

「ああ、そういうことですか」

サンドイッチを一口。
うん。

すごく美味しい。

「ちなみに、私の分の料金は木葉さんが出してくれるそうです」

「あ、そうなんだ。わかった。木葉くんのお給料から引いとくね」

「はい。もれなくお願いします」

こうして私のお金は護られた。
満足満足。

にしても。

本当に美味しいですね、これ。

「ねえ、イリーンちゃん」

「はい、何でしょう？」

「どうして私たちの仲間になってくれたのかな？」

「……？」

何を、言っているのだろう。

「お金に決まってるじゃないですか」

「……そっか」

悲しそうな顔。

どうしてそんな顔をするのでしょうか。

「イリーンちゃんは、お金より大事なことってあると思う？」

「ありませんよ」

お金さえあれば、何でもできる。
何でも、叶う。

あの時もあの時もあの時も。

お金がありさえすれば、すぐに解決したのに。

「私はね、あると思うんだ」

「……」

「お金よりも、ずっと大事なこと」

「参考までに、聞いておきます。それは何ですか？」

「へっ？ えっと、んー……分からない」

「はい？」

私をからかっているのでしょうか。

自分から切り出しておいて、分からないなんて。

「分からないっていうかね、言葉にしにくいんだ」

「言葉に、しにくい？」

もう、サンドイッチもオレンジジュースも無くなってしまった。

だけれど、出ていこうとは思いません。

なのはさんの言葉が、何故かとても気になったからです。

「私はね、9歳のときに魔法の力を手にするまでは、本当に普通の女の子だったんだ」

「……伺っています」

「だけどね、この力に憧れた。ずっと、使っていきたいなって思ったの」

「憧れた、ですか」

「そう。この力のおかげで、いろんな人とお話できたから」

そういうなのはさんの瞳は、すごく真っ直ぐでした。

思わず、見入ってしまうほどに。

「どうしようもない事情を抱えて、戦うしかない人たち。そんな人たちとでも、魔法をぶつけ合ってお互いが理解しあえるんだ。これって、お話してるってことだよね？」

「……ええ。少し、わかります」

魔法には、使う人の想いが宿る。

悲しみ、苦しみ、喜びや痛みまで。

きつと。

なのはさんは、それを相手の感情として捉えているのでしょうか。そして、自分も想いを乗せて魔法を放つ。

それをなのはさんは、話し合いだと感じている。信じている。

「フェイトちゃんと、はやてちゃんと仲良くなれたのも、そのおかげなんだ」

「それが、お金よりも大事なこと？」

「そんだね。あえて言葉にするなら……絆とか、繋がりって感じかな」

「……繋がり」

私は、そうは思いません。

思いません、が。

なのはさんの言葉には、何故か説得力があります。

それこそ、簡単に同意してしまいそうなほどに。

「だから木葉くんとも、もちろんイリインちゃんとも、繋がりが持てたらすごく嬉しいな」

「……………」

私は人殺しです。

そんな言葉を掛けてもらえる資格など――

資格？

優しくしてもらえる資格とは、何でしょうか。

よく、わからない。

「おい、なのはー！いつまで喋ってんだよ！」

「あっ、ごめんなさーい！」

だけど。

――だけれど。

「ごちそうさまでした、なのはさん」

少し興味が出てきました。

なのはさんの言う繋がり、絆。

「案外、楽しかったですよ」

お金とはまた違うもの。

私にも、それが見つけられるのでしょうか。
人殺しの、私にも――

「また、来ますね」

そうだ。

また来よう。

なのはさんに、もっといっぱい話をしてもらおう。

そうすれば、少しは見つかるかもしれないから。

「本当に、いいお天気です」

その時はまた。

木葉さんにご馳走になりました。

その重み

「確かに、きっちりいただきました……えへへ」

緊急召集の後、イリーンの勘定作業が開始された。

終始口を吊り上げ、数字をつぶやく光景は壮絶なものであった。

やっとだ、とクロノはため息。

「これで、話してもらえるんだな？」

「もちろんです、ご主人様」

なんか昇格した。

「……いや、今まで通りで構わない」

「そうですか。仰せのままに、クロノさん」

お金は怖い。

ともう一度言っておこう。

クロノは一度木葉たちの方を向き、木葉たちは頷きで応えた。

「ではまず、【管理局の管理者】についてもっと詳しく聞いておきたい」

「はい。前にも言った通り、そんなものは存在しません。依頼主だ

った方にそう名乗るように命じられていました」

「その理由は？」

「詳しくは聞いていませんが、なのはさんたちを殺すための名目だ
そうです」

一言一句を思い出すように、イリーンは目を閉じたまま語る。
風に語り掛けるような、安らかな声で。

「前にも言った通り詳しくは分かりませんが。なのはさんたちは後
々の計画に支障をきたすから、ついでに始末しておこう。」と」

「ついでについて……」

その発言に、なのはは絶句した。

そんなに理不尽に、身勝手に、あっさりと人を殺せるものなのか、
と。

「驚くのも無理はありませんが、私はそういう世界でずっと生きて
きました。そんなことが、普通の世界で」

イリーンはまだ救いようがある、と木葉は思った。

とても、悲しそうな目で自分のことを語るから。

そんな目をするのは、こちらの世界に未練がある所以だろう。

「後々の計画、か。そいつは今やっていることの他にも何か企んで
いるようだな」

そしてクロノは、気になった部分をエイミィに記録させている。

「んじゃ、次は俺のことだ」

一旦話を区切らせた時、名乗り出たのは木葉。

どちらかというと、今回の事件はこちらが本題だ。

「俺を狙う理由。そして、俺を殺せない理由を」

その時、イリーンが息を呑むのが分かった。

触れてはならない場所に触れてしまった。

そんな表情。

「……『CODプロジェクト』」

「あん？」

不意に出た意味の理解できない単語に、木葉は露骨に不審な様子。それをまったく気にせず、イリーンは進める。

「木葉さんに関わる全てが、その計画に回帰、起因しています」

「COD……プロジェクト？」

「今は、そうとしか」

そう言って、顔を伏せる。

これ以上は聞くな、というように。

「言えない理由が、あるんだよね？」

「おい木葉！その女、イリーンとは契約を交わしているんだ。話せない、と言われてあっさりと納得なんて――」

目の前のデスクを叩いて、クロノは激昂。

彼の言い分はもつともだ。

『そういう』契約なのだから。

だが。

「クロノ。別に俺は私情で引き下がった訳じゃない」

木葉はいたって冷静だった。

イリーンに視線を向け、珍しい微笑みを見せる。

「契約ってのは、俺たちの仲間になることだろ？なら、その答えで正しいんだよ」

「正しい……？」

「イリーンはこう判断したはずだ。俺が狙われる理由を話せば、俺たちにとって不利益になるってな」

そうだろ、とイリーンへ問いかける。

彼女は応えない。

ただ懇願するような瞳で、木葉を見つめるだけ。

「例えば。内容が衝撃的すぎて俺はおろか、なのはたちの戦闘意欲まで無くなっちまう、とかな」

「まさか……」

「あいつの目、見てみろよ。俺はめったに人を信じないがな、今のイリーンには信じるだけの価値があるように思う」

——クロノは、何も言えなかった。

木葉の言ったこと。

イリーンの様子。

嘘ではない、と確信した。
確信して、しまったから。
もう疑うことはできない。

「木葉さん……ありがとうございます」

「それはこっちの台詞だ。ちゃんと仲間でいてくれる」

「……………はい」

イリーンの中で、何かが芽生えた。
そう、木葉は思った。

「だけど、これだけは聞かせてもらおう」

一番、ずっと心の中にあったこと。

「俺の両親が――葉巻と落葉が殺されたのは、俺のせいなのか？」

この三日間の間に木葉は心を決めていた。

どんな返答であれ、受け止めよう。

たとえそれがやせ我慢だとしても、と。

「はっきり申し上げますと……」

緊迫。

その場の全員から、そんな空気がひしひしと伝わってくる。
フェイトは胸の前で手を祈るように組んで待つ。

しかし。

「正直、どちらとも言えないです」

「……は？」

返ってきたのは、あまりにも拍子抜けする答えだった。

「どういうことだ？」

覚悟はしていた。

お前のせいだと明言されても、受けとめる意志が、覚悟が木葉にはあった。

それなのに、そんなあやふやな答えではどう対処していいのかが分からない。

「意味の取り方次第で、木葉さんのせいでもあり、木葉さんのせいではなくなる。ということですよ」

「意味の取り方？」

「はい」

そこでイリーンは一息。

今の時点で話せる内容だけを選んで、頭の中で整理する。

「『CODプロジェクト』。木葉さんの言った通り詳しい内容は話せませんが、その計画の中に木葉さんの両親の死は含まれていないのです」

「……よく意味が分からない」

「いえ、言い方が悪かったですね。当初は含まれていなかった、と言うべきでした」

敵だった頃には見せなかった、悲しい表情。
これもまた、イリーンが仲間である証。

「依頼主の気まぐれなのですよ。両親が殺された木葉さんは、どんな反応を見せるのだろうか。楽しみだ、と」

「そんなっ——！」

木葉は何も話さない。

その代わりのように、フェイトが声をあげた。

「そんな……ことで？それだけのために？」

齒を食い縛り、自分を押さえ込む。

そうでもしないと、イリーンに掴み掛かってしまいそうな勢いで。

木葉はイリーンを仇ではないと言った。

仲間だ、と。

だから、イリーンを責めることはできない。

そんなことをすれば、木葉の決心を鈍らせてしまうことになる。

この怒りの感情は、イリーンの元依頼主に向けられるべきなのだ。

「酷すぎるよ……」

「……許せへん」

怒りを感じているのはフェイトだけではない。

なのはも、はやても。

ぶつけようのない怒りを、胸の内に抱いていた。

「イリーン。そいつの名を。その下衆な依頼主の名を教えてくれ」

そして。

もちろん、クロノも。

あくまでも冷静に。

しかし冷徹な声でイリーンに尋ねる。

クロノにとっても、木葉は仲間だ。
歳は少し離れているが、年下とは思えない独自の思考能力を持つ木葉。

自覚はしていないが、クロノはそんな木葉を仲間どころか良き友として認め始めていた。

友を愚弄された。

クロノの怒りはそこにあっただろう。

「前の依頼主、彼の名はジェイル。『ジェイル・スカリエッティ』です」

「——っ、スカリエッティだと!?!」

「彼をご存知でしたか?」

その名を聞いたとき、クロノの中である報告書が思い出された。
管理局のデータベース。

その中でも、よく目にする資料。

「知っているも何も、奴はS級の次元犯ぎ——」

「んなもんでもいい」

何の反応もなかった木葉。

相当落ち込んでいるのだろう、と誰しもがそっとしておいた木葉が、ようやく顔を上げた。

落胆の表情ではない。

そこに宿るは、なのはたちと同じ感情。

「どうでもいいんだよ。そいつがどういいう奴かなんてよ」

怒りだ。

イリーンと初めて会った時とは違う。

冷たくて、痛い怒り。

そんな木葉に、誰も口を聞けなかった。

「今回ばかりは、面倒くせえとか言ってられねえよ」

すでに木葉には、ジェイル・スカリエッティしか見えていない。くだらない理由で両親を殺した相手しか。

「潰して、終わらせてやる」

それぞれの決意

敵の正体が明かされてから、早一週間が過ぎようとしていた。

ジェイルは拠点を一定期間で移しているらしく、居所の捕捉はできていない。

しかし、イリーンの証言から今までのデータを入手できたこともあり、アジトの特定にはそう時間は掛からないだろう。

目下捜索中である。

なお、彼女が3日間ジェイルの下へ帰らなかった結果、自然と彼女の契約は破棄された。

初めからそういう条件だったらしく、アジトにスパイとして送った時には既にもぬけの殻であった。

そして。

イリーン。

彼女が話した過去も、木葉たちには壮絶なものだった。

そんな彼女が最後に言った言葉。

お金より大切だという繋がりを、教えてほしい、と。

イリーンは、一度失ったものを再び手に取る決意をした。

だから。

木葉たちはそれに応えたいと思った。

「ストラス！」

《shooting mode（射撃形態）》

それぞれの想いを通すため。

木葉たちは力を手にするための修行に励む。

「追撃位置補正！04…22…15”218，CLOCKWISE
12」

《all right. count4（補正完了。追撃開始まで4
秒）》

木葉とストライトネスの連携効率も、始めと比べると格段に上がった。

あらゆる場所に設置されている狙撃用の目的を、持ち前の思考能力で的確に落としていく。

「すごいね、木葉くん」

そんな木葉を見つめながら、なのはがぼつりと言った。

「成長の早さが、普通じゃないよ」

「そやな。木葉くんの能力がうまいこと働いてるのかもしれん」

はやてもそれに同調。

艦船アースラの訓練室は1つしかないため、木葉以外は自然と外から見ているしかなくなる。

なのは、はやて、フェイト、そしてイリーンも。

この3日、木葉の訓練をただ傍観していた。

「はやてさん。木葉さんの能力というのは？」

「ああ、イリーンちゃんは知らなかったっけ？」

【瞬時思考】 っていうってな、簡単に言えば頭の回転がめっちゃ早い。そやから、一番自分に必要な力とか訓練とかも、すぐに『分かって』しまうんやろな」

「……なるほどです。だからあの時——」

思い出されるのは、2回目の戦い。

まったく反応しないと思えば、急に相手の攻撃を読み切った勝ちに繋がる動きをみせた。

あれは考えていたからですか、とイリーンは納得。

「木葉くんの成長速度か。その力も関係あるんだろうけどね」

また新たに目的を破壊する木葉を確認しながら、なのはは語る。

「決意ってのが、一番の要因だと思うよ」

「決意、ですか？」

「うん。木葉くん、理不尽なこととか大っ嫌いでしょ？絶対にスカリエッティを倒すっていう決意。それが木葉くんを駆り立ててる」

「以前の木葉とは、目が違う。何かを決意した、強い目だ。」

「そう、なのはは感じていた。」

「しかし。」

「そう、なのかな？」

「ずっと黙っていたこの者には、そうは感じられなかった。」

「フェイト。」

「木葉を一番想う人物だ。」

「やっぱり、木葉は無理してるよ。復讐なんて面倒くさいって口では言ってたけど、本当は違う気がするんだ」

「フェイトちゃん……」

「私には、あの目がすごく怖い……遠くに行っちゃいそうで、木葉がっ——壊れちゃいそうで」

「怖い。」

「きつく唇を噛み締める。」

『まるで、昔の自分のような眼をしている』

一番想っている相手だからこそ、感じてしまうことがある。

ジェイル・スカリエッティに対する憎しみ。そして固執。
それに取り付かれたようで、とても冷えた目。

昔、一度同じような経験をした故に、敏感にそれを感じ取ってしまった。

「フェイトちゃん、しっかりして？」

「……………」

「もし、そう な っ ちゃ っ た 時 は――木葉くんが復讐しか見えなくな
っ ちゃ っ た 時 は、フェイトちゃんが止めてあげなきゃいけないんだ
よ？」

「……私、が？」

「そうだよ。木葉くんが、好きなんですよ？」

「……………うん」

木葉が好きなこと。

何時なのはにばれてしまったのだろう、と考えたが、今は気になら
ない。

活路を、見つけた気がした。

「そうだ。私が、木葉を守ればいいんだ」

1人の少女の想いが、堅く決まった。

それぞれの想いが交錯して。

彼らは、まだまだ強くなる。

フェイトが強く決心を抱いている頃。

訓練室の中で戦う木葉もまた、ある思考に駆られていた。

「強く、なってやるっ——」

目的の設置物を破壊するたび、その想いは強くなる。

今より強く。

もっと強く。

「ストラス！ラスト決めるぞ！」

《OK, my load. sword mode, stand by》

近距離戦闘と遠距離戦闘。

2つの使い分けも大分子慣れてきた。

ストライトネスの形態がトリガータイプの銃身から日本刀に移行。
目の前の障害を瞬時に撃破する。

呼吸を整えながら、とりあえず一息。

「なのは！もっとランクを上げてくれ！」

「ちよ、木葉くん！まだ続けるの！？」

荒い息遣いのまま叫ぶ木葉に、なのはは理解した。

フェイトの言っている不安要素が、本当に木葉の中で芽生えているのだと。

「当たり前だろ！短期間で強くなるには、量をこなさねえと——」

強くなること。

木葉はそれに捉われすぎている。

一度無理をして堕ちた経験のあるなのはには、その気持ちが痛いほど分かった。

だからこそ。

止めてあげなければ。

フェイトが心配している通りだ。
このままでは、壊れてしまう。

「強くなるって、じゃあ、何のために？」

「そんなの決まってるだろ。ジェイルを倒すためにだ！」

「ジェイルを倒す。それは誰のため？」

「だから、決まってる。俺は——」

それから先の言葉がでない。

木葉が息を呑むのが分かった。

自分の中での、矛盾。

——両親の仇？

違う。

それは木葉自身が否定した。

——管理局のため？

それも違う。

そんなことに興味はない。

「俺は……」

矛盾している。

前後が繋がらない。

理由がない。

何かのためにやっていることとしては、証明できない。

結局は、責任転嫁なのだ。

理不尽な出来事が重なった挙げ句、その責任をすべてジェイルに転嫁した。

ジェイルを倒すことで、自分が救われると思い込んで。

両親が殺されたことも。

イリーンの暗い過去も。

得体の知れない『CODプロジェクト』のことも。

ジェイルを倒すことで昇華しようとしていた。

「今の木葉くん、フェイトちゃんが言うように怖いよ。このままじゃ、スカリエッティを殺しちやいそうなくらい」

また。

逃げ道を作ってしまった、と木葉は自分を嘆いた。

ジェイルに腹が立った。

自分勝手に他人を巻き込む奴を、許せないと思った。

ただ、それだけの話だったのに。

いつの間にか、自身を救おうとしている自分がいる。

「……悪い、なのは。それにフェイトも。変な心配かけたな」

強くなること。

その意志は変わらない。

「まったく、俺らしくもない」

しかし、目的は違った。

「何か気負いすぎちゃってた。俺がやるのは、裁きなんかじゃない」
制裁者なんかではないし。ましてや、神でもない。

割り切った人生。

と自己評価してきた木葉だが、それを今改めた。

両親のことは割り切れてなんかいなかった。

ジェイルが憎いのではない。

ただ、悔しかったのだ。

力がないことが、悔しかった。

だから今は、力を求める。

自分の意志を貫くための。

大切な何かを、守るための力。

「なのは、勝負してくれ。俺はまだまだ強くなるからさ」

「怪我しても、知らないよ？」

木葉の表情が変わったのを感じ取ったのか、なのはもようやく笑みを浮かべる。

「いいよ。イリーンが治してくれるし。……それに、いつかは勝つてやるから」

慣れた手付きでストライトネスを構え、臨戦体制。

それになのはも応じ、愛機のレイジングハートを起動させる。

そんな光景を、フェイトは少し落ち着いて見ていた。

「なのはに、先越されちゃったかな……」

私の仕事だって、なのはが言ったのに。

口を尖らせるが、その表情は穏やかだった。

呆気なくなのはに吹き飛ばされる間抜けな顔の木葉を見て、あれが木葉だ、と小さく微笑んだ。

さらなる力

男ならば。

そんな表現は今の世の中男女差別的なのかもしれないが。それでも。

男ならば、一度は懂れたことがあるだろう。

「なあ、なのは」

「ん、なに？」

「必殺技が欲しいんだけど」

「……ほえ？」

訓練終わりの夕刻。

お腹すいたなー、などとなのはが他愛の無いことを考えながら歩いていた矢先、木葉がそんなことを言い出した。

「スターライトとか、プラズマとか、ラグナロクとか——それっぽいものが欲しいんだよ」

「言いたいことは分かるんだけど……とりあえず聞いとくね。なんで？」

必殺技。

その響きだけで卒倒しそうなくらい興奮するものだが。

欲しい、と言われても一筋縄で生み出せるものではない。

何より、木葉には砲撃系は負担が大きすぎる。

それに耐え得る魔力、ひいては体力がないのだ。

「イリーン戦のときに気付いたんだよ」

「気付いた？」

「ああ。俺には、決定打がない」

相手を殺してしまつては、元も子もない。

よつて、非殺傷設定は解除できない。

そうになると、今の木葉攻撃パターンでは相手を戦闘不能に追い込む手段がなくなつてしまうのだ。

「でも、イリーンちゃんには1人で勝つたよね？」

「だから、あれはズルなんだよ……」

ゆえに、必殺技（笑）が必要になつてくる。

一人でも戦えるために。

「ズルつて……どんなことしたの？」

「あー、あんまり言いたくなかつたんだけどな。他の奴に言うなよ」

イリーン戦で使った力。

なのはを手招きし、耳元で小さく告げる。

なんとなくだが、普通ではないと気付いていたがゆえに、内緒にしていた力だ。

「え……えええ!？」

「っあ!急にでかい声出すな！」

「ご、ごめんなさい——じゃなくて、そんなことできる訳……」

「知らねえよ。実際にきたんだから」

両耳を塞ぎながら、少しいじけ気味に木葉。

一方なのはは驚愕で固まってしまっている。

「本当だとしたら、何でそんなことが……でも、もしそうなら木葉くんの魔力光が白銀な理由も説明できちゃうし」

「な?ズルっこだろ？」

木葉たちが歩くアースラの廊下には他の局員たちもいる。

その全員が2人を妙な目で見ていくが、今はそれさえも気にならない。

「確かにね。普通じゃないよ」

「でも、それに決定力は皆無なんだよな」

「んー、そんなことないかもよ？」

なのはは戦技教導官だ。

能力の効率的な使い方。

つまり、小さな力を大きな力に変える方法など、いくらでも知っている。

「これから砲撃系を作るより、その力を巧く使えば凄いことになるよ！」

「いや、だから。一発の攻撃力は変わらねえし、相手を気絶させられなきゃ——」

「できるよ。気絶させられるほどの攻撃。その力でね」

「……は？」

矛盾しているんじゃ、と木葉は思った。

一撃の攻撃力は同じなのに、威力が変わる方法があるのか、と。

「隙を付けばいいんだよ」

「隙？」

「そう。思いもよらない攻撃。相手の思考の死角を狙えば、威力は何倍にもなる」

予測している衝撃と、不意を付かれた衝撃とでは、受けるダメージは比べる迄もなく後者が大きい。

人間である以上、誰しもがその法則に当てはまる。

「理屈は分かるけど、そんな都合良く不意なんて付けねえぞ？」

「じゃあ隙を作っちゃえば？」

「あん？」

「身近にいますでしょ？そんな力を持った仲間が」

「……そういうことかよ」

見つけた。

自分の能力を活かすさらなる力を持っている人物。

「あの子なら、木葉くんの能力に付加価値を付けられる。相性は抜群だよっ」

「よし、さっそく行ってみるか」

「って、今から!？」

「早いに越したことはねえよ！」

なのはの手を引き、足音の響く廊下を軽やかに走りだす。

行く先は、木葉の希望。

イリーンの元へ。

「イリーン？彼女ならさっき嬉しそうに振込みに行ったぞ？」

「振込みって……あんな大金どこに振込むんだよ」

とりあえずイリーンを探しにクロノを尋ねてみたが、あいにく留守にしているようだ。

なのははというと、あまりに「ご飯ご飯！」とうるさいので木葉が帰らせてやった。

「彼女に用事でもあったのか？」

「まあ、幻術魔法でも教えてもらおうと思って」

「……幻術魔法？なんで君がそんなものを」

訝しげにクロノは問うが、どこか興味津々といった様子。

対してイリーンがいないと分かった木葉はうなだれる様に座り込ん

だ。

「簡単に言っちゃもうと、弱いからだな。弱い。戦うには、弱すぎる」

「……弱い、か。なら、僕と戦ってみるか？」

「は？」

いや、クロノが言わんとしていることは分かる。

木葉が実戦に弱いことは、先のイリーン戦で実証済み。
模擬戦という形で実戦不足を補おうということだろう。

それは分かるのだが。

「急に協力的すぎるってか……なんか嫌な予感がするんだけど」

「何を言っている。実戦不足は実戦で補完するしかないだろう」

「言ってることはもっともだけどき。おまえ、まだ前のこと怒ったりしないよな？」

「……………そんな訳ないだろう。君がフェイトに何をしようが僕には関係ないさ」

「今の間はなんだよ!？」

笑顔が逆に怖い。

というか目が笑ってない。

できればお断り申し願いたい木葉だが、今のクロノに逆らうだけの
勇気がなかった。

「もちろんやるよな、木葉？」

「……了解」

それから。

『あれ』が本当に実戦で使えるのか。
試してみる機会でもある。

そんな意味も含めて、木葉はクロノと共に今来た道を引き返した。

「デュランダル、セット・アップ」

《OK, boss》

「……ストライトネス、セット・アップだ」

《yes, my load》

アースラ訓練室。

2人の魔術師が対峙する。

イリーンのそれよりもずっと濃い青色。
そして、白銀。

「木葉、君の成長も見させてもらう。本気で来い」

「本気で行かなきゃ、俺が死ぬだろ。ストラス、射撃モード」

日本刀からトリガー拳銃へ移行。
それを目線の高さに合わせ、銃口をクロノに向ける。

「遠慮なく、行かせてもらう！」

そのまま引き金を引いて3連発。
狙うはクロノの胴体。

威嚇射撃の場合、小さい頭を狙うよりも体を狙うほうがずっと効率的だ。

「はあっ——」

クロノはそれを動くことなく、右手に携えたデュランダル一本で全て弾く。

今度はこっちの番だと言わんばかりに特攻を仕掛けるべく足を踏み出すが、そこに木葉の姿はなかった。

「——目眩ましか！」

こういったケースで次に対処すべきは背中。

クロノは素早く振り向くが、そこにも木葉はいない。

「よく見ろよ」

下。

声は、クロノの足元から聞こえた。

「くっ！」

駆け上がるように振りぬかれた木葉の日本刀を、振り向くことなく後ろ手で防ぐ。

そのままつばぜり合い。

「どうやって、僕の足元につ」

「どうもこうも、ただしゃがんでただけだ。おまえ、先を読みすぎなんだよ」

クロノが木葉は後ろにいると考えたのは、今までの戦いの経験から。

それは経験からくる勘。

だが実際には、一目で分からぬ様低くかがんでいただけ。

深い思考は、単純な見落としを増幅させてしまう。

「頭が堅いな、クロノ」

挑発しながら、バックステップで3歩。
クロスレンジの距離から退いた。

(……なぜ木葉は引いた？後ろを向いていた僕の方が不利な状況だったはず)

木葉からは攻めてこない。

まるでクロノの攻撃を待っているかのように。

(……なにか不具合でも生じたか？もしそうなら、一気に畳み掛ける！)

クロノは無数のシューターを周りに設置。

訓練を始めてまだ数日の木葉にまともな障壁は張れないだろう。

当たれば終わりだ。

そして。

「てやあっ！」

全てのシューターが木葉へ――

熱冷まし

2人の攻防。

1人は立って。

1人は倒れた。

一方その頃。

フェイトとはやてが夕食を終えたとほぼ同時、なのはが力なく食堂に姿を見せた。

話によると、木葉の相談に付き合っていたらしい。

しかし空腹に耐え切れず、抜け出してきた、と。

どうやらイリーンと話をつけるために行ったようなのだが、彼女は現在留守だとフェイトは聞いていた。

そこで、そのことを伝えようとはやてと共に木葉を探しているのだが。

「見付からへんなー、木葉くん」

「うん。どこ行っちゃったんだろ？」

いくら探しても見付からない。

クロノに聞いてみようにも、なぜか彼も姿が見えない。

「あと探してないのは……ん？」

「はやて、どうかした？」

はやてが訝しげに視線を向けるのは、ここから少し進んだ部屋。

先程後にしたばかりのはずの訓練室から、明かりがこぼれている。

「明かりは消しといたはずなのに……」

「もしかしたら木葉くん、秘密の特訓とか始めてたりするんかな」

「あの木葉が？」

「……ありえへんな」

本人の居ないところでずいぶんとひどい言われようだが、これは普段の木葉が悪いのだろうか。

そうは言いつつも訓練室に入った2人は、中央付近で倒れている人物を発見した。

「え、木葉？」

まさか本当に無理な訓練を？
と、その人物の身を案じて急いで駆け寄る。

しかし。

「木葉！木葉っ——じゃ、ない？」

「どう見てもクロノくんやね」

倒れているのはなぜかクロノ執務官。

「う……うう」

彼女たちの声に反応したのか、俯せの状態から手を突いて起き上がろうとする。

「クロノ、起きた？」

「ん……フェイト、か」

「なんでこんな所で寝てたの？」

「いや、寝てたわけじゃないんだが」

木葉とクロノで態度が違いすぎる。

これも思春期の恋する乙女だからこそ為せる技だろう。

「実は、木葉と軽く戦ってみたんだがな」

「た、戦ったって」

「ん？ってことはクロノくん、まさか負けたんか？」

「……よく分からない」

負けて悔しいという表情ではない。

どちらかというと。

負けた理由が理解できない、と思索している様子。

「分からない？」

「確かに木葉を追い詰めたはずなんだ。なのに、あの時――」

詰めの一歩。

無数のシューターを展開し、勝利を確信した時。

「なぜか制御できなかった。いつもなら簡単に扱えるはずなのに、自分の魔法が暴走したんだ」

「暴走って……クロノが？」

「ああ。自爆した」

――これは。

……笑っちゃ、ダメだ。

クロノは真剣なんだ。

フェイトとはやては必死で唇を噛み締める。

「で、でも、クロノくんが魔力暴走なんて、ありえへブフォッ」

「笑うな……」

堪えきれなかった。

「ごめんごめん。ほんまに珍しいことやから、つい」

「珍しい、ね。本当にそうなのかな」

「クロノ、どういうこと？」

ごほん、とわざとらしく咳払い。

今さら体裁を整えようとしているのが見え見えである。

「木葉の行動が不審だった。まるで、なにかを狙っているかのよう
に」

「……クロノの魔力暴走を、狙ってた？」

「考えたくはないがな。もしそんな事ができるなら、文字通り最強
だ」

相手の魔法を操れる。

そんな能力が存在するとしたら。

「有り得ないね」

「だろうな。できるとしたら、何かのトリックか……何にしても、
してやられたよ」

それでも嬉しそうに語るクロノは、やはり木葉の友なのだろう。

「それで、木葉はどこに？」

「たぶん置いていかれた」

「クロノくん、どんまいや」

「あれは『勝った』って言えるのかな」

アースラの一室。

とは言っても、女子禁制の花園。

男子トイレ。

これではフェイトたちが見つけれなかったのも仕方がない。

《you should have a pride. I think you are good job.

（もっと誇ったらどうですか？良かったと思いますよ）》

思考に更けると、木葉はトイレの個室に籠もる。

直せといわれても直らない、昔からの癖だ。

「だけど、ズルには違いないだろ」

《No. it's your power. (マスターの能力ですよ。ズルじゃありません)》

今は、先程の模擬戦の反省中だ。

終わり良ければすべて良し、とはいかない。特に、実戦では。

自分の一手。
相手の一手。

それだけで、状況は逆転し得るのが実戦だ。

「能力、ね。【カラートリック色彩偽装】だったよな。おまえが付けてくれた名前」

色彩偽装。

それこそが、木葉の瞬時思考に次ぐもう1つの能力。

瞬時思考とは人間が持つ能力としてはふさわしいものだったが、後者は違う。

色彩偽装は、言うなれば異能力。

まず、木葉には専用の魔力光が存在しない。

自由自在。

自分が思った通りの色で魔法を構成することができる。

《I think it's a good name, like mine.》

(とても良い名前です。私の名と同じくらいに)》

「おまえはその名前、気に入ってたんだ……」

ベースは白銀。

なぜなら、魔法を初めて生み出した原因が明りが欲しかったから。白銀は電灯として最も有効だったし、木葉も自由な色を作り出せるのが普通だと思っていた。

実戦で使用したのは過去2回。

一度目はイリーン戦。

決定打を持ち合わせていなかったため、3つのシューターに違う色を乗せて上空に放った。

桃色。

黄色。

白色。

俗に言うはったりをかました訳だ。

そして二度目は、先のクロノ戦。

接近戦で受け手に回った後、離れることでクロノに追い討ちを仕掛けさせる。

そこへ接近したときに設置しておいた青色のシューターを紛れ込ませ、攻撃の刹那に追撃。

「不意打ちが有効ってのは証明できた訳だ。クロノみたいな真面目な奴ほど、引っ掛かりやすい」

なのはの言った通り、攻撃力のない木葉の力でもクロノを気絶させることができた。

これは大きな収穫だ。

「この力に幻術を重ね合わせることができるなら」

《it's a great.

（素晴らしいですね）》

「ああ。不意打ちも楽にできるだろうし、なにより戦闘方法の幅がぐんと広がる」

思考終わり、と個室のドアを開け、食堂に向かう。

一応手は洗っておいた。

「忙しくなるな」

《but, you look funny.
(でも、楽しそうです)》

「楽しい？そう見えるか？」

《yes.》

「そっか。なら、そうなんだろうよ」

木葉は変わった、とフェイトに言われたのを思い出した。

自分はこんなに感情豊かな人間ではなかったはずだ。

魔法と出会って。

なのはと出会って。

フェイトと出会って。

はやてと出会って。

クロノと出会って。

イリーンと出会って。

木葉は変わった。

変わることが良かったのか悪かったのか。

今はまだ分からない。

《can you be teach Ms. Ilin?
(イリーン嬢は教えてくれるでしょうか?)》

「教えてくれるさ。そんな気がする」

しかし、きっとこれからも出会いはたくさんあるだろう。

だから。

また変わっていくんだろうな、と木葉は思った。

願わくは。

ここにいてみんなと一緒に。

「たぶん……金さえ払えば」

《i t ' s s o . (ですな)》

並んで歩く

始まりはいつも突然だ。

きっかけは些細なこと。

突然始まるのだから、こちらはそれに順応しなければならない。

まるで、世界に操作されているかのように。

運命など、決まり切っているかのように。

「さてと。イリーンが帰ってくるまで何するかな」

あの後まっすぐ食堂に向かった。

行った時間が時間だったため誰もいなく、静かに夕食をとることができた。

《shall you take a bath?

(お風呂なんてどうですか?)》

「ああ、いいな。結構汗かいたし」

そんな他愛ない会話を交わしていた時。

目の前の空間にパネルが展開された。

「木葉！」

クロノの声。

先程放置したことを怒っているのかと思ったが、様子が違う。

真剣な声だ。

「見つかったか？スカリエッティのアジト」

「いや、そうではないんだが。というか、何で君はそんなに冷静なんだ？」

「気にすんなよ。性分だ」

冷静でいられる。

そんな訳はない。

表には出さないが。

今にも飛び出したいほどに、木葉の心は騒いでいた。

「で、そうじゃなかったら何の報告だ？」

「以前スカリエッティが使っていたと思われる場所から、生体反応が出た」

「生体反応？」

「ああ。詳しい数は分からないんだが、木葉はどう見る？君の意見が聞きたい」

生体反応、と一口に言われても、そこから考えられる可能性は多大だ。

だからこそ、木葉の頭をクロノは頼った。

「……今考えられる可能性は、2つだ。

スカリエッティってのは人体実験を主としてるらしいから、その実験体の生き残りか。

あるいは、大切な『何か』を守るために警備兵を配置したか」

「それで？」

「俺の考えだと、たぶん両方。

せっかくの実験体を放っておくとは考えにくいから、警備兵がいる。逆に警備兵がいるってことは、貴重な実験体がまだ残っている。危険だが、調査は不可欠だろうよ」

「よし。僕も同意見だ」

ならば、やることは1つだ。

まだまだ実戦に不安はあるが、今なら十分戦えるはず。

「いけるか、木葉？」

「いけ、って言ってくれよ」

「そうか。それでいい。なのはたちにもすぐに通達する。転送装置まで来てくれ」

胸に下げたストライトネスをぎゅっと握り締めている。

震えているのは怖いからではない。

嬉しいのだ。

やっと前に進める。

期待、と言い換えてもいい。

「風呂はお預けみたいだな」

《b u t , y o u c o m e b a c k s o o n .
(でも、すぐ帰ってこられますしね)》

「ああ、頑張ろうぜ」

ここから転送装置までそう距離はない。

適当な速度で歩くうちに、すぐ着いてしまった。

イリーンがいないことだけが気がかりだが、致し方ない。
彼女は大切な預金中なのだから。

「木葉、なのはから聞いたよ？ 木葉の変な能力の話」

「変なっていうな。つーかなのは、他の奴に言うなって——」

「堅いこと言わないの。仲間なんだから知っててもいいでしょ？」

なぜだろう。

言っていることは正当で純粹なのに、『文句言うな』と聞こえた気がした。

「……まあ、いいけど」

だから深くは追及できない。
戦う前に命は失いたくない。

「確かにびっくり能力やから、不意打ちには向いてる。期待してる
で？」

そして。

4人は転送装置に並んだ。

行く先は第39管理世界、トレジア。

特に発展もしていない、何もない世界だからこそ『やりやすい』。

イリーンにはクロノが連絡しておいた。

「イリーンがくる前に、片付けちまおう」

「うん。いいね、それ」

「でも木葉、無理はだめだよ？」

「フェイトちゃんは心配しすぎや。木葉くんはもう一人前の魔術師
なんやから平気やろ。な？」

「はっ——当たり前だ」

そんな4人を見て、クロノがエイミィに合図を送る。

「頼んだぞ、4人とも」

4人が笑顔でうなずくと、そこからゆっくりと姿を消した。

第39管理世界トレジア。

荒廃の一途を辿っているその世界の一角に、それは存在した。

山の中の穴蔵に見せ掛けた研究施設。

ジェイル・スカリエッティの元アジト。

「見るからに、って感じだな」

「うん。それに、強く感じるよ。言葉にできない、嫌な感じ」

なのはの言うそれは、どこから出ているのだろう。

警備兵の放つ殺気か。

それとも。

居るであろう実験体の悲哀なのか。

「何にせよ、進むしかないやろ」

そう言って先手の一步を踏み出した刹那。

「——っ、待て、はやてっ！」

ぐっとはやての手を引いて無理やり引き寄せる。

そのほんのコンマ空白の後、はやての居た場所が見えなくなった。

否。

おびただし数分の槍が叩き込まれ、視界が遮られたのだ。

「……し、死ぬかと思った」

そのまま地面に座り込み、呆然。

声も震えている。

「アホかおまえは。イリーンが言ってたろ。奴らは人を殺すことに躊躇いを持たない。入口に何かあるのは当然だ」

「す、すまん。これで敵にも勘付かれてしもた」

「そんなもんどうでもいい。生きてさえいればな。どの道潰していく予定だったんだからよ、探す手間が省けた。ナイスガッツ」

「……ちよつと馬鹿にしてるやろ？」

死ななければ、生きてさえすればいい。

それは潜入時の真理だ。

木葉は一旦入口から離れ、作戦を練ることにした。

「隊列は一列縦隊で進む。先頭は機動力のあるフェイト。次に俺が付いて逐一作戦をたてる。その次にはやて、後方支援。最後は防衛

の堅いのはだ」

「うん。了解」

「後1つ――」

瞬時思考。

自分の力を理解しているからこそ、

「生きて帰るためだ。疑わず、逆らわず、躊躇わず、何も言わず――俺に従え」

すべての責任を、自分がとる。
覚悟があるから言える言葉。

「うん。それも了解」

それを分かっているからなのはたちは頷く。

木葉の決意。

ここまで一緒にやってきた仲間だ。

分かるに決まっている。

「んじゃ、行くぞ」

そして。

彼らは進む。

ここからが始まりだ。

「すごいね……」

フェイトがつぶやく。

山奥の穴蔵とは思えないほどに、中は機械的な造りになっている。

壁、床、天井、すべてが鋼鉄製。

特に入り組んだ様子もなく、奥へ一直線。

多く存在する生体ポットの様なものには、何も入っていない。

「実験体ってのは、ここに入れられてた訳だ」

「みたいだね。その生き残りがもしかしたら……」

「ああ。どこかにいるだろうな」

通路には先は見えない。

いったい何処まで繋がっているのだろう。

そのまま進むこと数分。

常に気を張り詰めての数分は、思った以上に体力を消耗する。

「……そろそろか」

フェイトの肩をつかみ、歩を止めさせる。

「木葉、どうかした？」

「対人用にトラップを仕掛けるタイミングってのがあんだよ。見てな」

軽く1つシューターをセット。

そのまま進行方向へ飛ばすと、一瞬の光が走って――

木葉のシューターは消滅した。

「……今度は高電圧。結構古典的だよな」

当たり前のように言う木葉に、3人は口が塞がらなかった。

もし、というのは戦場ではあり得ないが。

それでも。

もし、木葉がいなければ。

考えるとぞっとする。

「味方が罠に掛かってちゃ、元も子もないからな。こういう無機質な罠にはある程度の規則性があるんだよ。距離だったり、匂いだったり、小さな目印だったりな」

「……えっと、木葉は何でそれを？」

「面倒を避けて生きるために必要なことは頭に叩き込んである」

「……………」

木葉が生きてきた世界って普通の地球だよね？となのはたちは確認。

しかし。

それが当然、の様に言われてしまうと深く突っ込めない。

「次は二重トラップだからな。気を付けろよ」

「い、いえっさー」

つくづく思う。

木葉が味方でよかった。

意味ある犠牲

木葉が立ち止まる場所。

そこには多少の誤差もなく、トラップがあらゆる手立てで仕掛けられていた。

ここまでは予想範囲内。

ただ。

スカリエッティがこれで終わるはずがない。

確信にも似たそんな考えが、木葉にはあった。

そして、警備兵の存在。

今までのトラップはすべて機械によるものであり、人為的な攻撃はまだない。

一瞬の気の緩みが命取りになる。

「……扉」

そんな中。

4人がたどり着いたのは、ただ大きいだけの飾り気の無い扉。

ここが終着点なのだろうか。

「木葉くん」

「なのは、どうした？」

「嫌な感じが強くなってる。たぶん、中に敵がいるよ」

声が聞こえた訳でも、物音がした訳でない。

ただの勘。

戦いの中で自然と身についた、魔術師としての勘だ。

「確かか？」

「うん。1人じゃない、集団で」

「わかった。ナイスだ、なのは」

ひとまず扉から下がり、体制を立て直す。

侵入と待ち伏せでは、後者が圧倒的に有利だ。

だが。

出会い頭さえ乗り切れば後はなんとかなる。

こちらには、3人のエースがいるのだから。

「耳貸せ、作戦を伝える」

「……って感じで、準備はいいな？」

木葉の問いに、3人は首を縦に振る。

それを確認して、今度は木葉がフェイトに首を縦に振って合図。
作戦決行の合図だ。

『――相手はおまえ等が来るってことは知ってるよな？ 有名人だし』

「いくよ、なのは、はやて！」

「うん！」

「おっけーや！」

『――なら戦術としては、はやてを第一に墜としてくるだろう。遠距離支援は一番隙が大きい』

扉を思い切り押し開くと、予想通り。

そこには数十の戦士たちがいた。

『——そして俺の情報は少ない。俺の能力を知ってる奴なんざ尚更だ』

「スプライトザンバー！」

「ディバインバスター！」

『——まずはなのはとフェイトである程度蹴散らせ』

「闇の書の主だ！白の魔導師を潰せ！！」

『——そして、はやてに向かってくる敵は、』

「残念、はずれだ」

「——男！？」

『——色彩偽装で俺が引き付ける』

数が数だ。

木葉が接近戦を鍛えてきたからといって、無傷で切り抜けられる状況ではない。

ただ。

これは、勝つための一手。

「ぐっ——」

傷ついても。

致命傷さえ負わなければ、それは作戦としては大成功だ。

『——その後は任せたぞ、はやて』

「木葉くん！なのはちゃん！フエイトちゃん！」

扉から少し離れてはやて。

詰めの一歩。

「天よりそそぐ矢羽となれ——フレース・ヴェルク！」

最後に立っていたのは、木葉たちだ。

はやての長距離支援魔法。
敵が恐れるだけはある。

「——っ」

「木葉！」

しかし。

今は勝利の余韻に浸っている余裕はない。

息絶え絶えの木葉に、フェイトたちが向かう。

「そんなに騒ぐな。平気だよ」

「平気って……血がっ！」

頭から腕から。

おびただしい赤が木葉を染め上げていた。

「そう思うなら早くここから出るぞ。目的も見つかったしな」

「え？」

「忘れたのかよ。危険をおかしてまでここに來た理由」

木葉たちがいる部屋はそんなに広いものではない。

進んできた通路を考えると、むしろ小さいほどだ。

その一角。

生体ポットの中身。

30代ほどの男性が1人、目を閉じて浮かんでいた。

「この人……」

「知ってる奴か？」

「知ってるっていうか……管理局のエースだった人だよ。十数年前から行方不明だって聞いてたけど」

書類で目を通したくらいのようなだが、管理局では有名な人らしい。

「詳しいことはクロノカリンディさんに聞か。こいつ連れて、ここから脱出するぞ」

「ちょっと、まずいな……」

思ったより血を流しすぎた。

生体ポットの中身。

生きてはいるが目を覚まさない男を背負い、木葉は舌打ち。

力が入らない。

「木葉、やっぱり手伝うよっ」

「いって言ってんだろ。おまえ等は敵襲に全力で気を配れ」

後はここから出るだけだ。

気の緩みが死を招く状況下で、集中を欠く訳にはいかない。
失敗なんてできない。

「で、でもっ」

「しつこいぞ、フェイト。そうこうしてるうちに――」

足音。

前方から、1人ではない。

「こんな感じで、出口を固められちまうんだよ……」

一方通行の通路で一番恐れるべきはこれだ。

退路を断たれる。

狭い場所で乱戦になれば、個人の強さなど関係ない。

単純に、数が勝つ。

「圧倒的、だな」

こちらは5人。

内1人は目覚めぬまま。

内1人は歩くのがやっと。

対して、相手は10人強。

「こ、木葉くんっ」

勝敗は決した。

「落ち着けよ、なのは」

——かに思えた。

「俺が——仮にも瞬時思考と名を冠してるこの俺が、こんな初步的な戦術を見過ごすと思うのか？」

ニヒルに笑う。

その表情のまま右手を上にかざし、パチンツと高らかに指をならす。

「観念しろ！もう貴様らに逃げ道はへボウツ——」

「た、隊ちょガフンツ——」

そして築かれるのは、警備兵の残骸。

たったそれだけの動作で、木葉はこの場を制圧した。

「……木葉くん、どうやって——」

「相手が退路を塞いでくるのは分かってたんだ。だから、先手を討っておいた。奴らの背後にシューターをあらかじめ設置しておいてな」

10人強の警備兵たちは、揃って意識がない。

不意討ちは強い。

なのはに言われた言葉通りだ。

「でも、そんなの気付かれちゃうんじゃない……」

「そういう場面で使わなきゃ、何のための色彩偽装だよ」

「あっ！」

つまりは、軍隊の迷彩服と同じ原理。

ステルス。

天井と同じ色に『偽装』したシューターを、迷彩の要領で隠していた訳だ。

「すごい……」

「ただ俺がスカリエッティなら、不確定要素を考慮してもう1つ手を用意する」

さらに足音。

先程とは比べものにならない。

人、人、人――

10人どころではない。

奥が見えないほどの敵の数。

「……こんな風に、第二波を準備したりな」

深くため息。

「そして、これは読めても手の打ち様がなかった」

スカリエッティの天才ぶりは、伊達ではないらしい。

裏の裏まで、しっかり読んでくる。

「私の砲撃ならなんとか——」

「隙だらけだろ。俺たちが足止めできる数でもない」

「……木葉くん、次の策を用意してたりはしないの？」

「悪い。魔力切れ。ガス欠」

そんな会話を交わすうちにも、敵の大群は迫ってくる。

八方塞がり。

——そんな時。

「……ん？」

「こうなったら、一か八かで……」

「待て、はやて」

「木葉くん？」

「どうやら、その必要はないらしい」

確かに感じた。

よく知っている魔力の気配。

「おまえらも感じるだろ？あいつが来た」

「……この魔力」

「ったく。最高のタイミングだ。いや、最悪のタイミングか」

それが、入口の方から近づいてきているのが分かる。

よほど安心したのか、傷のこともあって、木葉は地べたに座り込んだ。

「一対多において、あいつほど使える奴はいないな」

今度の足音は、間隔が小さく聞こえた。
子どもの足音だ。

大多数の敵に埋もれて木葉たちからは見えないが、居るであろう場所から声が聞こえた。

とても、澄んだ声。

「お待たせしました、皆さん」

「……遅い」

「すみませんね」

長い黒髪に、蒼の瞳。

純白のドレス。

幻想的な蒼の光。

「入金手続きって、意外と時間がかかるんですよ」

その後で

「あ……あああああ■ ■ ■ ■ ■——！？！」

「ひっ、た……助けっ——」

地獄絵図。

木葉たちを今にも捕えようとしていた警備兵たちの状況は、そう呼ぶにふさわしかった。

木葉たちには見えない『何か』に怯える彼らは、麻薬の中毒者のように見ていて痛々しい。

もちろん原因は、イリーン。

「効果覲面だな、おまえの幻術」

「集団で襲ってくるしか能のない連中程度に、見破られる私ではありませんよ」

むべなるかな。

11歳とは思えない自信。

時々、この子はコ○ン的な存在なんじゃないかと思うときがある。

「木葉さんでさえも、1回目は騙されましたしね」

「……まあな」

イリーンだから。

彼女だからこそ、簡単に騙される。

——こんな少女が

——こんな子供が

そんな焦りが、さらに焦りに拍車をかける。

「いったい……何をした、小娘？」

「なんだイリーン。漏れがあるぞ、漏れが」

「いくらなんでも数が多すぎですよ。徐々に墜とす予定です」

イリーンの力は幻術。

実際には存在しないものを見せる力であるため、木葉たちには見えていない。

ゆえに、イリーンが操るのは——揺さぶるのは相手の脳だ。

当然数に限度がある。

「あつそ。んじゃあさつさと片付けてくれ。おーい、おっさん」

ぴくつと警備兵の眉が動いた。

おっさん呼ばわりが気に食わないらしい。

「忠告してやる。気を付けろ。この子は、空間を『操り』『ねじ曲げ』『歪ませ』、そして『支配』する」

「……何を言うかと思えば」

馬鹿にした声。

嘲笑。

木葉の言葉をまるで信じていない。

それも当然。

嘘なのだから。

しかし、だ。

たった1%。

『もしかしたら本当かもしれない』という観念さえあれば、そこに漬け込む技術がイリーンにはある。

「そんなことを出来る人間など、この世……に、こ、この世にっ——いるはずがあああ!!」

恐怖。

つい先程まで嘲りの表情だった男の顔は、見事なまでに恐怖に染まっていた。

いったい何を見たのだろう。

この世の終わりのような表情は、狂気に満ちていた。

「さあ、出ますよ皆さん」

それだけ言って、イリーンは即さと歩きだす。

そんな彼女をなのはたちは哑然として見ていた。

「イリーンちゃんって、もしかして最強なんじゃ……」

「だね。イリーンは怒らせないようにしよう」

「激しく同意や」

帰りは早い。

特に警戒する必要もなく、なにより精神的に余裕があり、思っていたよりも早く出口に着いた。

「……死ぬ」

木葉だけは別だが。

血をたっぷりと失っている上、成人男性を背負っているのだ。

行きの数倍の疲労感。

「木葉、やっぱり無茶だったよ」

「ああ。俺もそう思う」

見栄はっちゃった。
と後悔。

「……う、ん？」

「しかもこのタイミングで起きるのかよ」

声が聞こえたのは木葉の背中。

もう少しだけでも早く起きて欲しかった。
まったく、ついてない。

「あの……あなた、セオドアさん、ですよね？」

目覚めた男。

すぐに意識は覚醒。

「んあ？おう、なんだ可愛らしいお嬢ちゃん。確かに俺はセオドアだ。それは何よりも正しい」

この男は。

自分の状況が分かっていないのだろうか。

なのはの話によると、彼は何年も前から行方不明だったらしいのだが。

「おい、おっさん。あんた自分の状況が——いてえっ」

殴られた。

「おっさんじゃねえ、お兄様と呼べ小僧！もしくはセオ兄でも可だ！」

駄目だ。

この男。

木葉の一番苦手なタイプ。

「兄って歳じゃねえだろ……」

「何言ってやがる！どっからどう見てもピチピチの20歳……あれえ！？ふ、老けてる！なんか老けてるぞおい！！」

馬鹿だ、コイツ。

「あー……あれだ。とにかく整理しようぜ？よーしそれがいい」

セオドア。

管理局の元エース。

「えっと、俺が行方不明になったのがちょうど10年前で……記録では死んだことになってる、と。んで、俺を閉じ込めていたのはジエイル」

「そういうことになりますね」

「だあっはっはあ。俺はなにか、10年眠りに就いていた王子様ってところか！」

「笑い事なのかよ……」

彼は地べたに足を組み、なのはたちの話を聞いていた。

この男にとっては10年の空白は許容範囲らしく、さして落ち込んだ様子はない。

「おい、セオドアのおっさん」

「だからおっさんって言うんじゃない……あ、ちょっと待て。今計算するから」

両手を開いて、1つずつ指折り。

「今30じゃねえか!? 思ったより老けてるな。よし、おっさんでもいいだろう!」

「……いや、もうどうでもいいけどよ」

馬鹿は疲れる。

面倒くさいから。

というか。

セオドアは自分の人生を軽視しすぎだ。

「あんた、何でスカリエツティに捕まってたんだよ?」

「ん? えっと確か……あれ? 何でだっけ?」

……耐えろ。

木葉は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

10年間、この男は機能していなかったのだ。
多少の記憶不明瞭は致し方ない。

「おお、思い出した思い出した！噂を聞いたんだ！」

「噂？」

「そう、裏のルートから入ってきたもんだから確信はねえがよ。ジエイルの野郎が、いかにも怪しい実験——もとい、計画を建ててるつつうな」

「……計画」

「名は『CODプロジェクト』つつったか。それを詳しく調べようと潜入したんだが……」

結局は、そこだ。

CODプロジェクト。
すべてはそこへ起因する。

この物語を終わらせるための、唯一の鍵。

「ちなみにそれ。内容がぶっ飛んでてイカれた計画だよ——」

「セオドアさん」

その邂逅。

計画の内容を話し始めるセオドアをイリーンが制した。

その際、木葉に視線を送る。

まだ知るべきではない。

そう言いたいのが分かったから、木葉は黙認。

「そこまで話される必要はありませんよ」

「ん、ああ？そうか」

それもそうか、とセオドア。

彼なりに空気を読んだのかもしれない。

「それじゃ、俺は行くぜ？」

「は？おっさん、管理局に戻るんなら俺たちが仲介するぞ？」

「ばか。今更管理局なんかに戻るかよ、ばーか」

馬鹿に馬鹿って言われた。

二回も。

精神的ショックが大きすぎる。

「せっかく死んだことになってんだ。自由に生きるぜ、俺は。余生、
ってやつ？だあっはっはあ！」

「……セオドアのおっさん。あんた家族は？」

「いるぜ？ いや、正確にはいるかも、か。なんせ10年前の記憶だ」
特に感慨にふける訳でもなく、事実を淡々と語る。

記憶を辿る作業、と言い換えてもいい。

「嫁さんと息子、俺が捕まる少し前には嫁さんの中に娘が1人」

「おっさんには勿体ないくらいの幸せ家族じゃねえか……何で戻らない？」

「言っただろーが。俺は死んだ人間だ。今ごろしゃしゃり出るなんざごめんだ」

「家族はあんたを迎えてくれるだろう？」

「それでも、だ。帰るにしても、まだ何も終わらせてねえだろーが」
それだけ言って、セオドアは皆に背を向けた。

「俺の仕事を終わらせる。独自のルートでジェイルの野郎を見つけ
てやるよ。お仕置きだ。だぁっはっはぁ！」

豪快に高笑いし、足を踏み出す。
どうやら、本当に消えるらしい。

それを見て、

「おっさん！」

珍しく、木葉が大きな声をあげた。

「俺たちも奴を追ってるんだ。すぐに、潰してやる。だから――」

「……」

「遅れて来んなよ？」

そこで。

セオドアはククツと堪えるように笑った。

不意に出てしまった。

そんな笑い方で。

「小僧、気に入った！」

「木葉だ。小僧じゃない。神崎木葉」

木葉、と目の前の少年の名を反芻し、飛び上がる。

「俺はセオドア。セオドア・ランスターだ」

それが礼儀だと言うように彼も名を名乗り、

「今度会う場所は決まったな、木葉」

高く。

空に消えた。

まずは一歩

少しずつ。

ほんの少しずつ、人は支え合って生きる。
補い合って生きる。

それが人の本質ならば。

守るための力は、どれほど強いことだろう。

セオドア・ランスター。

彼の話をクロノに詳しく聞いた。

どうやら元エースというのは本当らしく、
様々な逸話が存在している。

――曰く、ナイフ1本で強大な犯罪組織を壊滅させた。

――曰く、頭突きで戦艦を数十墜とした。

――曰く、眼力で人を殺した。

いくつかはただの噂なのだろうが、
それでもセオドアの異常さが伺える内容だ。

それからもう1つ。

セオドアの奥さんと息子。

その2人はもうこの世にいない。

息子――ティータ・ランスター。

彼が亡くなったのは、ほんの数週間前だそうだ。

「おっさん……あんたは、尚更消えるべきじゃねえだろ」

残されたのは10歳の娘1人。

彼女を守るのは、セオドア・ランスターの役目だ。

「早く終わらせねえと。……セオドアのおっさんを、娘のところへ戻さなきゃならねえ」

新たな目標ができた。

木葉自身のため。

そして。

セオドアの娘。

ティアナ・ランスターのために。

ジェイル・スカリエッティを捕える。

「イリーン、いるか？」

「どうぞ、入ってください」

イリーンの個室。

何もない簡素な部屋。

「話はなのはさんから聞きました」

木葉をベッドに座るよう促しながら、イリーンは扉を閉める。

「強くなりたい。理由はそれだけですネ？」

木葉は頷く。

そう。

それだけだ。

「辛い修行になりますよ？」

「分かってるさ」

「いいえ。たぶん分かっていません」

隣に座る。

シートが軽く沈んだ。

「幻術魔法——特に相手の脳に作用する魔法は、激しく魔力を使います」

質より量。

イリーンの膨大な魔力量を持ってこそ、今日のような使い方ができ

る。

「木葉さんの魔力量では1人が精一杯。それさえも普通の状態では難しいのです」

イリーンには、分かっていた。

そうやって脅してみても、木葉が諦めないことを。

隣に座って。

木葉の目を見て。

そう、思った。

「それでも、やりますか？」

だが。

敢えて聞いてみることにした。

木葉の口から。

木葉の言葉から。

意志を確認したかった。

「やるよ」

それに対し、木葉は当然のように答える。

「理由が増えたんだ。どうしても強くならなきゃならない、理由が」

ベッドから立ち上がり、イリーンと向かい合う。

意地。

根性、と言い換えてもいい。

強くなる。

その意志は、木葉が前へ進むための第一関門だ。

「私に逆らわない。これが条件です。いいですね？」

「了解だ」

「よろしいです。先程、普通の状態では難しいと言いました。それではどうするか。『普通ではなく』すればいいのです」

「普通ではなく？」

「相手を、ですよ？そのためには――」

「感情を揺さ振る、か」

「……流石木葉さん。優秀です」

幻術とは、結局のところ相手の脳の伝達回路――シナプスを操る行為だ。

何でもいい。

相手の感情をあらかじめ揺さ振っておけば、そこに割り込む隙が大

きくなる。

「木葉さんには、瞬時思考——話術があります。それで相手の感情を乱すことができれば」

「付け入る隙が生まれる」

ニヤリ、と。

「俺の得意分野だ」

「では、早速修行を始めます。まずはコーヒーを入れてください」

「おお、何に使うんだ？」

確か昔映画で見た。

一見修行と無関係そうなもので強くなる。

なるほど。

やはり修行はこうでないと。

「たくさん話して喉が渴きました」

「私用かよ!？」

本当に無関係だった。

『「私に逆らわない。これが条件です。いいですね？」』

「了解だ」』

「あれ？さっきデバイスに記録しておいた会話が勝手に……」

こうして。

歳の差4つ。

奇妙な先生と生徒の関係が誕生した。

「だーかーらー、もっとこうガーツと……分かります？」

「こ、こんな感じか？」

「違うんですねー。どこが違うかと言いますとね、なんか、うん違います」

「……はっきりしろよ」

『「私に逆らわない。これが条件です。いいですね？」

「了解だ」』

「あれれ？さっきデバイスに記録しておいた会話がまた勝手に……」

「……………」

同じ方向を向いて、木葉とイリーンは前後に並んでいる。

イリーンは前。

木葉は後ろ。

そして木葉の両手は、イリーンの体に伸びていた。

「ほら、もっと強く。そうそう、その調子です、木葉さん」

教師と生徒。

ロリコン。

様々な世間体的に危ない問題に引っ掛かりそうな発言だが、そうではない。

手が触れているのは、肩だ。

イリーンの小さな肩。

つまりは肩揉みの真っ最中だ。

「……子どもが肩凝るかよ、普通」

「口答えしないでください、この奴隷が」

「降格してるぞ!？」

「うるさい。もう敬語も無しだね。奴隷とご主人様だもん。むしろ敬語使え」

「ふてぶてしい!」

キャラを放棄しやがった。

――さて。

一応言っておくが。

これは私用ではなく、修行の一環だ。

肩揉みと言っても、木葉は手を動かしていない。

魔力の放出だけで、気持ち良くさせてみよ。

それがイリーンの出した第一の課題。

「いい？ 幻術魔法の強さは魔力精度とイコールなの。これくらいで
きなきゃ、お話にならないよ？」

「だから頑張ってやってんだろ？」

「ん、結構気持ち良くなってきたね」

本当に。

11歳で肩凝りとは。

人生を無駄にしている気がする。

セオドア・ランスター並みに。

一方。

捜し人。

ジェイル・スカリエッティ。

彼はある次元世界にひっそりと存在していた。

「『CODプロジェクト』。実験体2号はひどい失敗作だったが……1号、神崎木葉は順調のようだ」

フフッと不気味に笑う。

「この調子でいくと、この3号は必要ないかな。そうは思わないかい、月城？」

1つの生体ポット。

その中には5・6歳ほどの少女。

『それ』を眺めながら、スカリエッティは隣の青年へ話し掛けた。

「僕は、そうは思いませんね。神崎木葉。あれも失敗作ですよ」

「クククッ、酷いことを言うじゃないか。一応私の傑作なのだよ？」

「その割には警備兵ごときに手こずりすぎです」

先程の木葉たちの戦い。

彼らはそれを、観察するように見物していた。

「だが、突破してみせた」

「イリーン。彼女の力ですよ」

「それも計算の内だよ。彼女も未だ、私にとっては駒だ」

「敵に回っても、ですか？」

「違うな。敵に回ったからこそだ。彼女は本物の修正者なのだよ。
神崎木葉を導くね」

「……まったく。あなたは恐ろしい。何を考えているか、全く分からない」

月城、と呼ばれた青年は、軽く嘆息。

「なら、私たちもあなたの駒ですか」

「どうか。君たちの働きには期待しているよ」

それだけ言って、スカリエッティは姿を消した。

大方、研究の続きなのだろう。

1人残された月城は、生体ポットの少女を見上げる。

「あなたも、【決定事項】なんですかね」

そのつぶやきは、誰にも捉えられていない。

最悪の始まり

そろそろ始めよう。

アースラの一室。

フェイト・T・ハラオウンの個室。

その部屋に人影は2つ。

部屋の持ち主であるフェイトと、そしてイリーン。

そんな珍しい組合わせで、2人はテーブルに向かい合っていた。

「それで、木葉はどんな感じなの？」

「いい感じですよ。木葉さん、飲み込みが早いです」

「瞬時思考、だね」

「ですね」

廊下でばったりと出会っただけの2人。

普段なら軽く挨拶する程度なのだが、そのまま話し込んでしまい現在に至る。

話題の共通項は、神崎木葉。

「イリーンは、どう思う？」

「どう、とは？」

「木葉の力のことだよ」

それぞれの手元には、ホットミルク。

香ばしい薫りが立ち込める中、フェイトが真剣な面持ちで切り出した。

「瞬時思考、これはまだ分かる。だけど、色彩偽装。この能力は――」

「異常、ですか？」

「――っ、……そう。異常、だと思う」

気にしないようにしてきたこと。

しかし、考えずにはいられなかった。

なんとなく、気付いていたからかもしれない。

木葉は。

神崎木葉は、自分と『同じ』なのではないか、と。

「……時々鋭いですよね、フェイトさんは。本当に時々ですが」

「2回言わなくても……」

「あなたの考えていることで、たぶん正しいですよ」

「え？」

ホットミルクを一口。

まるでそう質問されることが分かっていたかのように、落ち着いて答える。

「木葉さんは、あなたと『同じ』です」

「なつ——！じ、じゃあ……」

「クローンとは少し違いますが、フェイトさん同様人工生命体……いえ、違いますね。『弄られた人間』という表現が的確でしょう」

「……何で、急に教えてくれる気になったの？」

CODプロジェクト。

その内容はイリーンによって伏せられていたはずだ。

その、理由は——

「私たちのために、だよね？」

「……あなたなら」

自身のコップを持って立ち上がる。

おかわりだろうか。

台所へ向かいつつ、イリーンは話を続ける。

「フェイトさんなら、受け入れてくれると思ったからです。真相も、木葉さんも」

よく見てくれている、とフェイトは思った。

イリーンを仲間として認識するようになってから、その日は経っていないが。

それでも、彼女と仲間であつた、と。

だから。

ホットミルクを注ぐイリーンの背に、ありがとうと小さくつぶやいた。

「色彩偽装。あれはおそらく『CODプロジェクト』の副産物です」

「副産物ってことは、あの力を作ろうとした、ってことじゃないんだね？」

「はい。木葉さんの能力はどちらも偶然の力です」

「……生み出したのは、スカリエッティだね？」

「です。彼の最高傑作だそうですよ」

そう言いながら台所から戻ってくると、手に持ったコップをフェイトの前に置いた。

「今話せるのは、ここまでです」

そのまま座ることなく、扉に手をかける。

どうやら、ミルクは元々フェイトのために入れてきたらしい。

「ねえ、イリーン」

最後に。

もう1つ聞いてみたいことがあった。

「なのはが言ってたこと、覚えてる？」

「……お金よりも、大切なもの」

「そう」

いつからだろう。

イリーンが居るのが当たり前になっていたのは。

「今のイリーンなら、分かるんじゃないかな？」

「……」

「そうでなくても、見え始めてはいると思うよ？」

「……はい。なんとなくですが、それは分かります」

「そっか」

どちらからともなく微笑んで。

その笑みを残したまま、2人は別れた。

「おい木葉。幻術修行の第二段階、始めるよ？」

「ついに呼び捨てになりやがったか」

翌日の訓練室。

広い場所が必要になるとのこととで、ここに移動してきた。

「えっと……イリーンちゃん？」

「何で私たちまで……」

「ここに呼んだんや？」

木葉組全員集合、的なシチュエーション。

5人がそろって訓練室に呼び出されていた。

「第二段階には、なのはさんたちの力も必要なのです」

「どういうことかな？」

「実は第二段階とは、同時に最終段階でもあるのですよ」

その発言に、木葉たちは呆気にとられた。

修行開始からわずか2日。

こんなにも簡単に修得できてしまうものなのか。

「簡単じゃないんだよ、木葉。本当なら最低1年にかかる作業なの」

「なら、なんで」

「木葉が望んだからだよ。早く強くなりたい、って」

「あ……」

「それに、スカリエッティとの戦闘も近いから。ちんたらしている暇ないの」

望んだから。

イリーンは木葉の期待に応えようとしていた。

そんな中、フェイトの雰囲気が変わる。

「木葉。なんでイリーンが敬語じゃなくなってるのかな？」

「は？」

「は？じゃなくて。何でか聞ってるの」

声に抑揚がない。

木葉にはその理由が分かっていた。

——怒っている

理由は分からないが、目の前の少女がとりあえず恐かった。

「そりゃ、イリーンが師匠みたいなもんだからって。こいつが勝手に……」

「……木葉がたぶらかしたんでしょ？」

「なんでだよっ！」

どうやら。

木葉にシリ阿斯は似合わないらしい。

それも彼らしいのだろう。

「……のろけてる場合じゃないんだよ、木葉」

「のろけてねえよ！」

「とにかく。この第二段階は荒療治。死なないでね？」

そう言って。

イリーンは右手を木葉の頭にかざした。

今までとは違う、真剣な表情。

「死なないでって——何すんだよ？」

ふう、と一息。

目を閉じて、手のひらに魔力を集中させる。

「幻術魔法は脳回路の操作。それを木葉自身で味わってもらう」

「なっ——」

「ただし、もちろんそれだけじゃ幻術魔法を使えることにはならない」

幻想的な蒼色の光。

それが、徐々に木葉の頭に浸透していく。

蝕むように。

じつくりと。

「だから、とびつきりを味わってもらおうよ？」

「とびっ、きり？」

「木葉の記憶をDNA単位で探って、一番辛い記憶を延々見てもらうことになると思う」

「それって……」

一番辛い記憶。

言うまでもなく、両親の記憶だろう。

それを、延々――

「それもあると思うけどね……」

歯切れ悪く話す。

こんなイリーンは初めて見た。

「たぶん、それだけじゃないよ」

そこで一旦話を区切る。

魔力を集中させるためか。

それとも、余程言いにくいことなのか。

「イリーンちゃん。なら、私たちが呼ばれた理由は？」

なのはとはやて。

彼女たちはただ立っていただけだ。

話を聞かぎり、力が必要になるとも思えない。

「……始めれば分かりますよ」

と、イリーンは敬語で言った。

その刹那。

「があっ——あ、ああああっ!!」

衝撃的な叫び声。

——木葉だ。

「なん、だっ……急に、頭がつ——」

とびっきり。

イリーンはそう言った。

今までのものとは、比べものにならない。

比べることなど億劫なくらいに。

全身に、全神経に衝撃が走る。

「木葉。私の予想通りなら、あなたが見ることになるのは——」

そこで。

記憶が途切れた。

そして夢を見る

暗闇から目覚めても。

目を開けると、そこは暗闇で。
だけ。

そんな闇の中でこそ。

一筋の光が鮮明に輝く。

巨大なビルが立ち並ぶ魔法都市。

管理局の人物なら大抵は見知った土地であろう。

第1管理世界『ミッドチルダ』。

「なんだよ……ここ」

イリーンは言った。

木葉の一番辛い記憶を延々見せられる、と。

しかし。

木葉はミッドチルダなど『知らない』。

「嘘をついたってことは、ねえよな」

ない。

それは言い切れる。

イリーンはこんなところでふざけられる人間ではない。

「だとすると、俺の記憶じゃないのが紛れ込ん……え？」

思考の最中。

木葉の足は、意志とは無関係に勝手に進み始めた。

——止まらない。

「おい、なんで！ ちょ、待て。そっちは——」

そっちは、道路だ。

普通に自動車が行き交う、一般道。

そのど真ん中で、木葉の足はようやく止まった。

「……ははっ。なんでここで止まんだよ。このままじゃ——」

視界に捉えたのは、一台のトラック。

こちらに気付いたのか、急ブレーキの音が甲高く響き渡る。

「死んじまうじゃねえか」

刹那。

すべての動きがスローモーションになった。

動けないのは依然変わらない。

——トラックが正面から、衝突した。

——爪が剥がれて指が千切れて手首が飛んで腕が消えて喉が破壊され舌がむしられ鼻が目が耳が脳が肺が胃が——

「イリーン。さっきの言葉、どういう意味？」

訝しむようにフェイト。

木葉は幻術の状態に入り、眠ってしまった。

「……………」

「木葉が見るのは、2000人分の死の記憶だって……」

「『CODプロジェクト』の一端。とだけ言っておきます」

今の幻術で大分魔力を消費してしまったのか、イリーンは力なく地面に座り込んだ。

「そんなことより、始まりましたよ」

「え？」

木葉が動いた。

脈打つように、ビクンと大きく。

「あああああっ——！！！」

そして咆哮。

自分の爪で、自身の体を傷つけ始めた。

「木葉くんっ！？」

なのは、フェイト、はやて。

それぞれ木葉を必死に押さえ付ける。

「たった今、木葉は一度死にました」

イリーンが付け加えるように一言。

幻術の中で、ということだろう。

「それを……後1999回——？」

「私の知っている限りの情報では、そうなります。あなた方を呼んだ理由、分かりましたか？」

「……木葉くんを、暴れないように押さえ付ける」

「です。死なない程度にお願いしますね？」

「……俺は、死んだんじゃ？」

見たこともない土地だ。

というか、建物だ。

木葉はビルの屋上にいた。

「……ちょっと待て。さっきと同じ感じになるとしたら――」

勝手に一步。

また、一步。

進む先には何もない。

下の地面まではかなりの距離がある。

「やっぱり、こうなるのかよ……」

浮遊感。

それもすぐに消え、重力の為すがままに降下。

どうすることもできず。

二度目の、死亡。

死の連鎖は終わることを知らない。

― 溺死
― 圧死
― 焼死
― 感電死
― 出血死
― 窒息死
― 凍死

「はあっ、はあっ……フェイトちゃん、はやてちゃん。これで何回？」

「た、たぶん1000は越えたよ……」

「ふう……後半分、か。私たちの体力が心配やわ」

イリーンは睡眠中。

余程疲れたのか、いつの間にかすやすやと眠っていた。

そんな彼女が眠る前に言った一言。

それが、なのはたちには気掛かりだった。

——木葉には、自分の存在の大きさを分かってもらわないといけないのです

神崎木葉。

彼は一体、何者なのだろう。

「……ん、あ」

「あ、起きた？」

すっかりお馴染みになってしまった、アースラ医務室。

一番奥のベッドは木葉専用と言っても差し支えないほどだ。

「……フェイト？」

「うん」

そしてこの組み合わせも、同様にお馴染み。
周知。

「どのくらい寝てた？」

「15時間ってところかな」

「なんだ。そんな、もんか」

疲労感は、明らかにそれ以上のものだった。

現実と夢の違い。

精神の疲労は意外と簡単にとれるものらしい。

もちろん、人によるのだろうか。

木葉にはそう思えた。

「俺が見続けたのは、死の瞬間。死の記憶だった」

「本当に、見たんだね。イリーンがそう言ってたんだけど、信じられなかったよ」

「きっかり2000人だったよ」

「……数えてたの？」

いや、と木葉は否定するように首を横にふる。

寝ている時にかいた汗が、額から首筋へ流れ落ちる。

「100回目あたりから、数えるのを止めようと思った。辛いだけの作業だったから、何も考えずにいたら終わるだろうってな」

「……うん」

「だけど、無理だった。いくら死んでも、いくら身体中が吹っ飛んでも、慣れなかった。……今でも、一つ一つを鮮明に思い出せるくらいに」

人間は学習できる動物だ。

それは『慣れ』という形で昇華される。

が、しかし。

死は人間である以上最終地点であり、そこから先は存在しない。

慣れろと言う方が酷なのだろう。

「なんで俺の記憶にあんなもんが、なんて聞いても教えてくれねえんだろうな」

「たぶんね」

——フェイトさんと『同じ』です

イリーンに言われた言葉が頭をよぎったが、これも木葉には言わないほうがいいのだろう。

イリーンはフェイトが告げ口しないと信じて、真実を語った。

信頼には、信頼で応えるべきだ。

「やっぱり、怖い？」

「……ああ。怖いな」

——驚いた。

てっきり、即答で否定するのだと思っていたから。

「自分が何者なのか。これからどうなるか。……そんなことじゃない」

こんなに弱々しい木葉を見るのは、二度目だ。

2人で誓い合った、あの夜以来。

「真実を知ったとき。俺は『木葉』なのか？おまえの知ってる神崎木葉のままで、いられるのか？」

あの時は一緒に泣いて。

最後には、笑い合っていた。

そんな繋がりもすべて消えてしまいそうで。

「俺はそれが、とてつもなく怖いんだ」

「木葉……」

そうなるようにしてくれたのは、木葉だ。

不器用に、力強く、そして優しく。

「平気、だよ」

だから今度は私が支えよう。
少しでも、木葉の力になろう。

フェイトは強く、そう思えた。

「木葉は、木葉なんだから。心配しなくても――」

「それでも……」

フェイトの言葉を遮る。

「それでも1番怖いのは、……フェイト。おまえを好きなこの気持ちまで、消えちまうんじゃないかってことなんだよ……っ！」

「――っ」

好き、と。

面を向かって言われたのは初めてだ。

しかし、彼女は動揺しない。

なぜ？

フェイトも、同じ気持ちでいるからだ。

「木葉。いい方法があるの」

「いい、方法？」

「うん。なのはに教えてもらった方法。大切な人を、失わないため

の魔法」

そう言って笑う彼女は、何よりも魅力的だった。

木葉が見てきたものの中で、何よりも。

「名前を、呼ぶんだよ」

「名前を……」

「もし。万が一木葉が自分を見失っちゃった時は、私が名前を呼ぶ。大好きな木葉の名前を、何度も、何度も呼ぶから」

「……………」

「だから、木葉も呼んでね？ 私の名前。たぶん……ううん、絶対。それで大丈夫だから」

「……本当かよ？」

「本当だよ。私はその魔法で救われたんだもん」

「なのはに、か？」

「うん」

大丈夫。

彼女がそう言ってくれるだけで、安心する。

惹かれた弱みだ、と木葉は思った。

「……その時は、頼むよ。フェイト」

「任せて。木葉」

新たな誓い。

良き友達だった2人の関係はなくなった。

それよりもずっと深い、強い想いで。

2人は結ばれることになった。

ただ、それだけの話だ。

翌日明朝。

昨日と変わらない朝。

神崎木葉は、アースラから姿を消した。

再びの形

木葉は何をしているのだろうか。

気にならないと言えば嘘になってしまうが、できるだけその事について考えないようにしている。

木葉が。

あの木葉が、やりたい事があると言った。

ならば、僕はそれを応援するだけでいい。

自己完結。

そんな親友を思いながら、南坂秀は授業に耳を傾けていた。

「――つまり、音の伝わりは空気の振動によるもので――――」

しっかり整理された机の上で、綺麗な文字をノートに綴る。

僕は真面目だ、という自覚が彼にはある。

しかし、必死にノートを埋めるのは彼自身のためだけではない。

親友が。

木葉が帰ってきた時に、授業に遅れないように。

彼の居場所を確保するための作業でもあった。

そうすることで、木葉が帰ってくるという確信を持たせたかった。

本日の終了を知らせるチャイムが校内に鳴り響く。

「明日からはテストになるから、ちゃんと家で勉強してくるようにな」

そんな担任の合図で、放課後が始まった。

大半の生徒は明日のために家へ直行。

秀も、その例外ではない。

「おい南坂。一緒に帰ろうぜ？」

「いいよー。今行くか……ら？」

不意に、何かが頭をよぎった。

「どうかしたか？」

「えっとお……ご、ごめん！用事があったの思い出しちゃった」

なぜだか。

居るはずのない彼が、呼んでいる気がした。

駆け出す。

その勢いのままに階段を駆け上がり、着いたのは屋上。

一旦のお別れを交わしたその場所に、彼は居た。

「……よお」

長めの黒髪を風になびかせ、気だるそうに片手を上げる親友。

「木、葉？」

「親友の顔も忘れちゃったか、ひで？」

そう言ってみせる皮肉めいた笑顔は、まさしく彼のそれだった。

「……いきなりだったから、びっくりしたんだよ」

「そっか」

「木葉、いっつもいきなりだよね」

「悪い」

「出ていくときも、いきなりだった」

「……だな。悪い」

2人の関係は変わらない。

秀が話し掛けて、木葉が面倒くさそうに応えて。

離れていた時間など無意味なほどに、2人は2人のままだった。

「それで。やりたい事は終わったの？」

「……いや。今からだ。今から、始める」

不意に、嫌な予感がした。

木葉が消えてしまうんじゃないか。
なぜか、そう思った。

「……帰って、くるんだよね？」

そう言うってから、秀は後悔した。

聞かなければよかった。

自分はただ待っているだけでいい。

そう、決めたのに。

「……ひでは、いつでも一緒に居てくれた。俺が嫌がっても、ずっと」

「……木葉」

「関わるな、とか突っぱねたこともあったけどさ。本当は、すごく嬉しかったんだ。俺に話し掛けるやつなんか、居なかったから」

いやだ。

聞きたくない。

これじゃあまるで、別れの挨拶に来たみたいじゃないか。

「嘘、ついてもいいか？」

「……………うん」

「帰ってくる。おまえが待っていてくれるなら、絶対に」

「絶対だね？」

「絶対だ。そしたらまた、遊ぼうぜ」

「なら、いいよ」

それでも。

秀には送り出すことしかできない。

木葉が本気で言っていることが分かってしまったから。

だから――

「いってらっしゃい、木葉」

前と同じ言葉をおくる。

ただ待っていていよう。

そう心に決めて。

「ああ。ちょっとそこまで、飛んでくる」

「みんな、落ち着いて聞いてくれ」

アースラの司令室。

なのは、フェイト、はやて、イリーンが揃うと、皆を集めたクロノが話しだした。

「木葉の姿が消えたことについてだが――」

木葉が消えてから数時間。

アースラ艦内は、その話題で持ちきりだった。

「考えられる理由は2つだ。1つは、逃走。戦いを前に恐れ、逃げ出した」

誰も反論はない。

なぜなら、木葉がそんなことをする人間ではないことくらい知っているから。

反論する方が野暮だと。

もちろんクロノも。

逃走の可能性など、微塵も考慮に入れていない。

「それで、もう1つの理由って？」

待ちきれないようにフェイトが切り出した。

落ち着いて見える外面は、焦りの裏返し。

ここに居る誰よりも、木葉の失踪に不安を感じていた。

「おそらく、だが――」

言い淀む。

自分の前に展開されている空間パネルを操作し、ある画面を浮かび上がらせた。

「クロノくん、これは？」

表示されているのはある世界の地図。

その中心には赤色で二重丸の印がある。

第1管理世界ミッドチルダ、と表記されている。

「なのはに教えてもらった日本語に、こんな言葉があったな」

「え？」

「『灯台もと暗し』……まさにそれだったよ」

深いため息。

それと同時に、達成感も感じられる表情で。

「まさか……」

「ああ。ジェイル・スカリエッティのアジト。昨日発見したところだ」

「……ミッドに、あったなんて」

「——クロノ！」

大声を発したのは、フェイト。

それを予期していたのか、クロノはさほど驚かずに応じる。

「それって、まさか木葉は——」

「……最新のインテリジェントデバイス——ストライトネスとあの木葉の頭脳があれば、管理局のデータベースへのハッキングも不可能じゃないだろう」

スカリエッティのアジト発見は昨日。

そして、木葉が消えたのは今朝早く。

これが何を意味するのか。

もし、木葉がクロノのデータベースを盗み見ていたなら。

もし木葉が、クロノたちが思っている以上にスカリエッティを恨んでいるとしたら。

「単独で、スカリエッティのアジトに乗り込んだと考えられるだろう」

「そんな——！」

あり得ない、とはいいきれない。

あの木葉のことだ。

無茶は当たり前。

無謀だってやりかねない。

自分のことになると、瞬時思考も鈍ってしまう。

「早く……早く追い掛けないとっ！」

そして、フェイトも。

木葉に関しての事項に、思考が鈍る。

「心配するな。すでに準備は終えてある」

それも、クロノには分かっていた。

フェイトの兄として。

ましてや木葉の兄にもなるのかもしれないのだから。

やるだけのことを、やってやろうと。

「イリーンも、いいな？」

「無論です。木葉は、仲間ですから」

「上出来な答えだ」

なのはとはやてには、聞くまでもない。

為すべき事は決まった。

「木葉は僕たちの仲間、同士だ」

後は行動に移すだけ。

「あの馬鹿を連れ戻そう」

変わった形

「……よお」

ミッドチルダ。

市街地から離れた奥地。
偏狭、と言ってもいい。

とにかく人気がまったく感じられない地に、木葉は居た。

「あんたが、ジェイルか？」

無感情に。

ただ、確認事項のように問う。

「違いますよ」

対するは青年。

白髪に透き通るような白い肌。

さらには白のスーツと、完璧に統一されている。

「僕はジェイル・スカリエッティの駒にすぎません。月城、と申します」

「……あっそ」

「Dr. ジェイルに用がお有りなら、僕が通達しますが？」

「お前ごときじゃ、話になんねえよ」

射ぬくような目付き。

――違う。

今まで観察してきた神崎木葉とは似ても似付かない。

月城は木葉の気配に圧巻した。

針の様に鋭く、冷たい。

「……まさか、『CODプロジェクト』が完成を？」

「完成、ね。間違っちゃいないな」

目を閉じる。

回顧。

「思い出した、ってのが近い。俺は、そっち側の人間だったってな」

きっかけは、イリーンの幻術。

あれを受けた時、木葉は自分の使命を思い出した。

「Dr. ジェイルのもとまで、ご案内致します。神崎木葉様」

「随分切り替えが早いな」

「木葉様がここに居るということは、あなたは我らが主と同然」

月城は深く一礼。

「その時、僕たちは木葉様の子分、舎弟、下僕であると決めています。ご無礼をお許しください」

「僕『たち』？」

「はい。我ら、5人編成の木葉様守護部隊『week day』。全力であなたをお守りします」

「……へえ」

まんざらでもないように軽い笑み。

木葉は知らない。

『仲間』だと信じている者たちが、近づいてきていることを。

「月城って言ったな、おまえ」

「はい。月城 ギジン 偽人です」

「偽人。まずは『week day』のメンバーに合わせろ。俺の守護が勤まるか、見極めてやる」

「仰せのままに」

何もない場所にひっそりと存在する階段。

スカリエッティとその部隊は地下に居るらしい。

特にこれといった戸惑いもなく、木葉は月城に連れられ、その中へ入っていった。

「ねえ、イリーン」

「何でしょう、フェイトさん」

そして。

そんなことが起きているなんて夢にも思わず。

木葉を助けに行くことしか頭にはないのはたちは、空を駆けていた。

目標地点まで約50分。

全力で飛んでこの時間は、かなり長いと言える。

「木葉は、幻術を使えるようになったの？」

「……使えますね、たぶん。脳に直接使用方法を叩き込んだようなものですから」

「なら、私たちが着くまでくらいは大丈夫だね？元気の、ままだ

よね？」

強がりで言っていることくらいすぐに分かる。

いくら幻術を使えるようになったくらいで。

急に強くなれる訳がない。

しかし、そんなことを指摘するほどイリーンも馬鹿ではない。

だから。

「はい。大丈夫です」

確信などないが。

はつきりと、それだけ言っておいた。

彼女たちも、知らない。

1人の『仲間』が、離れていこうとしていることを。

「木葉様。この5人があなたのものです。血も肉も、すべてあなたの」

地下、研究施設の一室。

月城偽人を含めて、5人の人間がそこには居た。

「……神崎木葉だ。おまえらの主になる。死ぬ気で守れ」

「見極めるのでは？」

「見りゃ分かる。こいつらは、強い」

男が3人、女が2人。

それぞれが特徴的で、個性的な格好をしていた。

「もうすぐ、ここに4人の女が来るはずだ。まずは、そいつらを殺せ。それが忠誠の誓いだ」

「……こんな所に」

なのはがそう呟くのも無理はない。

土で固められた地面に階段。

明らかなミスマッチで気味が悪い。

ジェイル・スカリエッティのアジト。

そして、たぶんこの中に居るであろう神崎木葉。

「準備はいい？」

敢えてなのは問う。

これは戦闘前の必須事項だ。

自分の心を決めるための確認。

「もちろんだよ。その為にここまで来たんだ」

「そや、木葉くんに死なれたら困るしな」

「私ものです。助けますよ。せっかく見つかりかけていた繋がりなんです」

「うん。それじゃあ、行くよ？」

階段は、外から見ると遥かに長かった。

螺旋状にどんどん下へ進む。

「前の所に似てるね」

第39管理世界、トレジア。セオドア・ランスターを発見したあの場所と、この施設は酷似していた。

全面鋼鉄の壁。

そして一本道。

何かこだわりがあるのだろうか。

「……見て。広い部屋に出るよ」

歩くこと十数分。

なのはが言うように、突如開けた部屋に辿り着いた。

2、30人は軽く収容できるほどの一室には、巨大なモニターと1人乗りのエレベーターが5つ。

そして。

モニターの前には2人の人影。

「木、葉？」

「……やっぱり、来ちまったか」

木葉の様子がおかしい。

フェイトはその変化にいち早く気付いた。

「残念だよ」

近寄りがたい。

そんな雰囲気。

「残念って……私たちは木葉くんを助けに来たんだよ!？」

「助けに、か。そりゃ、とんだ無駄足だったな」

「なっ……なんやそれ! 木葉くんが勝手に行ってまうから急いでこ
こまで——」

「はやてさん！」

イリーンの瞳は困惑だけが浮かんでいた。

木葉の隣に居る男。

イリーンは、彼を知っている。

「木葉の隣……あの男は、月城偽人は、スカリエッティの守護者です」

「えっ——？」

木葉に歩み寄ろうとしていた4人の足。

それが、ぴたりと止まった。

「それは違いますね、イリーンさん。今はこの神崎木葉様が、我らの主です」

「……なんや、それ」

「嘘っ……それじゃまるで、木葉くんがっ——」

敵になったみたいじゃないか。

「こ、木葉？これ、何かの冗談、だよね？」

「冗談なんかじゃねえよ。俺はスカリエッティ側にいる。おまえらを殺すためにな」

「嘘だ！！違うよ！木葉は——私の知ってる木葉は！」

「おまえの知ってる木葉は、もう消えた。悪いな、フェイト」

決壊。

自分たちと木葉の繋がりが、断たれたことが容易に分かってしまった。

「こんなことって……」

洗脳ではない。

それなら幻術のスペシャリストであるイリーンが見抜くはずだ。

ならばトロイの木馬のように、内から攻める作戦。

味方のふりをしているのか？

それも違うだろう。

スカリエッティがそんな単純な仕掛けを見過ごしてくれるとは思わない。

「ちゃんと割り切れ。整理しろよ。俺は、おまえらの敵だ」

木葉は、自らの意志でスカリエッティに従じた。

その事実が、なのはたちにとって一番苦しかった。

なぜ？

そんな疑問と後悔だけが押し寄せる。

「ここからはある種のゲームだ。俺たちを捕まえるか、おまえらが

死んでゲームオーバーか」

笑う。

いつも見せてくれる暖かい笑いではない。

冷たく、皮肉な笑い。

「じゃあ、これからゲームのルール説明をするぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9960x/>

奇跡の法則

2011年12月1日22時57分発行